

會



報

1966年1月

247

日本山岳会

◇賀正
昭和十七年

★私の近頃★

冠 松次郎

私は明治三十五年前後から山登りを始めた。そして四十二年に初めて日本アルプスへ入った。黒部の流域へ足を染めたのは四十四年であるが、登山人の入らなかつた黒部を探り始めたのは大正七年の夏からである。

最後に黒部を訪れたのは八十才の時、昭和三十七年の夏で、この時には下ノ廊下を歩いて見た。黒部川第四発電所の工事が殆ど完成し、ダムの上流に約十五キロの上湖が出現していた時である。

最初のうちは記録も写真もとらずに、漫然と山を楽しんでいたが、日本アルプスへ入るようになってから記録をとり、また後には写真をうつすようになった。その頃は日本アルプスにはあまり人が入っていなかったため、ことに黒部については記録も写真もとっておく必要を感じたからである。

北アルプスの山上には、北は白馬岳または立山から上高地に至るまで、延々百余キロにわたって小屋もなく、道もなく、人の入った地域ではそのふみあとをたよりにして歩いた。しかし三百年以上も前に建てられたという立山の室堂

と黒部中流の平の小屋だけがあった。

小屋がなかったから、米、味噌、副食物、防寒用品、雨露を凌ぐ油紙、合羽の代りに糸立をもち、土に敷くゴザの代用とした。

雑糞を肩からかけ、金剛杖と貧弱な細引綱で悪場では困難した。草鞋なども五人位で行くときには、山の人の分を併せると優に一人で背負う荷物だけのカサがあった。十日前後の山旅では、荷が多いため、どうしても山の人の手をおかりなければならなかった。それに道のない悪い谷を行くときには、谷に慣れた、壁に強い山の人の協力も必要であった。

山の人のよかつたのは、彼等は荷物の責任をもち、野営、炊事等を万手やってくれる。しかし彼等は決して私たちの行動に差し出口をしない。私たちが気ままにほおっておいてくれる。それだからなまじし気の合わない友と一緒に山へ入るよりも遙かに自由で、安気で、思うまま山の自然を楽しむことができた。今日でも私は、それが実によかつたと彼等に感謝している。

人の殆ど入らなかつた処に行くことが多かったから、知らない者同志の道づれで、案内者というものはなかつた。私たちが連れて行ったため、自然にルート覚え、案内者になった者も相当あった。昭和十七年までは相当歩いた。

昭和十六年十二月太平洋戦争に突入、同二十年八月終戦、それから十年くらは種々の故障のためギャップとなり、その後は既に七十才を越えて山歩きが困難になった。

北海道、東北、本曾などを探りながらも、九州にも行きたいと思いがちで、日本アルプスでまごまごしているうちに八十三才の老年になってしまった。しかし私としてはそれで満足であり充分である。

私は八十才を越えると急に身の衰えを感じてきた。最近では足と腰が不自由になって疲れると寝床にもぐりこんで身体をやすめている。あとのくらしまで生きられるものか、自分でも見当がつかない。しかし無病息災で八十才まで生きて来られたのはまことにありがたいことである。

過去の山旅のことを書いていると様々な光景が走馬灯のように動いてくる。戦を再びするということがあるが、曾て歩いた山・溪・森林・高原・動植物、それから親しくしていた山の友、山の人たちが、私の身や心をめぐって静かに動いてくる。私はそれをなつかしみながら幸福に暮している。

あの山、あの溪、それはどんなに私を魅惑し感動せしめたか、涙ぐましいほど嬉しさにみちた追憶である。今でも山を想うと私の生活に張が出てくる。

は日本アルプスのよきを知った。珠玉のような梓川の風景。穂高山や霞沢岳、焼岳の姿を仰いでアルプスの閃光に魅せられた。白馬山群もよかつた。祖母川を下って初めて黒部谷の片影に接した。爾来私は、立山・黒部・後立山をひとまとめにして、峯から溪へ、溪から

目次

- 私の近頃(冠松次郎) 物故名誉会員(山崎安治2) カフカズのこと(袋一平3) 六十周年記念山行(山形・宮城・越後・富山・石川・大分・福島4~6) 白岩山登山(成瀬岩雄) 紅葉会初参加(坂倉登喜子7) 牧之記念館(山崎安治7) パキスタンよりの通知(7) 日本アルピニズム(安川茂雄8) 会報バックナンバー(8) キンヤンキン報告(牧野内昭武9) マッターホルン登頂百年(松方三郎10) 高畑峠と大嵐山(崎精雄12) 年次晩餐会(山崎安治12) インド隊登山年表追補(松田雄一12) 年次晩餐会の記(山崎安治12) ウォーディントンの試み(角口想蔵14) 図書紹介(15) 海外図書雑誌(16) 会務報告(17) 会員章覚え書(松田雄一17) 会員異動(18)

ら峯へと縦横に歩いた。実をいうと上高地の美しいのは梓川を中心とした約八キロの景勝である。黒部へ入って驚いたことは、これは約六十キロの峡谷を中心とした山と溪の絶景であった。

んひき込んで行った。下流の宇奈月から黒雄川の落口を基点として樺平まで、さらに奥鐘山の大山壁をめぐって仙人谷、東谷、剣沢、棒小屋沢、十字峽、白竜溪などの下ノ廊下の中心部から内蔵ノ助谷落口に出て、下ノ廊下の城を脱すると遠く開けた中流の美観、優美快闊なその川瀬を、幽林を、清流を、川洲を縫って、赤沢、御前谷、御山谷などの落口を通過して平に達しそこでひと息入れた。この中の瀬の美観は、立山、赤沢岳、針ノ木岳、木挽山、赤牛岳などの山々の姿をめぐらして溪を行く者を限りなく喜ばしめた。

中ノ瀬の美観は東沢落口を最後としてやがてまた岩壁、奔流、深淵の谷筋にうつる上ノ廊下の風景である。黒ピンカ、上ノピンカをめぐる峽を過ぎて、赤牛岳と薬師岳との峽間をオクのタル沢の出合につく。谷はやがてまた広々とした快闊の景色を展開する。それから約六キロは源流地一帯の高原と山に包まれた黒部の流は、美しいリズムで楽しい谷渉となる。

高瀬の谷もよかった。下流の方は水力電気のために水が細って昔日のような流水の横溢は見られなくなったが、中流の東沢から湯俣水俣の出合までの風景は今でもすばらしい。落葉松の喬木林が山から溪にわたって千米もウツウツとしていているのは壯観である。水俣川もよいが湯俣川はさらによい。

高瀬で最も峻嶒なこの谷はまた高瀬の美溪である。

この谷はワリモ沢を中心として最も美しい。鷺羽乗越への登りもよいが、そこからの展望がよい。双六谷は金木戸、中ノ俣川、広河原、コグラ谷、打込谷、奥抜戸などを中心として、峻嶒と幽凄を懷に秘めた私の好きな谷だ。

私は吉野熊野では大杉谷と北又川しか知らないが、筏で北山川の奥ドロ、上ドロを下ったときの壮快な気分を今でも想い起す。筏に身を托して美しい鏡のようなトロの上をすべて行く。時は六月下旬、若鮎がトロや激流を切って上つてくる。象牙細工のような兩岸の簾壁には、紅に燃えるようなサツキの花が満開であった。カジカが流の底で鳴いている。ウグイスやセキレイなどの嘯りが水の上を渡ってくる。日本アルプスとはまた趣を異にしたのんびりとした美しさがあつた。

人生は楽しみに満ちている。たとえ峻嶒に苦しんだ山登りでも、楽しみが七分で苦しみは三分位である。人生の行路もそれによく似通っている。年老いている私は近頃はそんなことを考えている。

(昭和四十年十一月)

山岳第六十年号発行

山岳第六十年(一九六五年版)が一年中に発行され、本年度までの会費完納の会員にお送りいたします。会費未納の方は至急お払込みを。

物故名譽会員の推薦年月

山崎 安治

縣案の会員名簿が杉浦理事をはじめ関係者各位の尽力ででき上った。五年ぶりのものだけに利用価値は大きいと思う。

今度の名簿で物故名譽会員の(城、志賀、白井、大平の各氏)の推薦された月が一九六〇年版のまま空欄になつてゐるので、念のために調べてみた。城氏については山岳七三年三号の会務報告の中に「名誉会員城氏の計報」という十二行の記事が出てゐるだけで、ほかにもまった追悼文の一つもないのはどういう理由か不明だが、その最後は「大正十年名誉会員に推薦された」とある。しかし山岳十四年二号の会務報告欄には、大正九年二月八日午前十時より清水谷公園内皆香園で開かれた幹事会で推薦されており、同氏は三月二日付を以て名誉会員たることを快諾されたをもつて、会員名簿中名誉会員の部に追加すべきものとす」と付記されている。従つて同氏の推薦年月は一九二一年でなく、一九二〇年二月が正しい。城さんといえは会員番号第一号の方だけに、会員名簿に誤って記されてゐるのは申しわけない。

志賀重昂氏については山岳六年二号の会報欄に名誉会員推薦のこととその理由について、三ページにわたる報告されている。小島さんあたりの筆になるものと想像されるが、ウエストン師に次いで二人目の名誉会員である。ただ明治四十四年(一九一一年)の何月か正確にはわからない。山岳六年二号の発行は明治四十四年七月で、一号は五月に出ているから六月ごろのことであろうか。

三人目の名誉会員が太平晟氏で、大正八年(一九一三年)十一月九日午前九時から皆香園で開かれた幹事会で推薦されている。

四人目が白井光太郎博士で、同年十一月二十六日横浜の高野鷹蔵氏方から東京市麹町区富士見町四丁目武田久吉氏方へ移されたJACの事務所における評議

員会で推薦された。当日入会を許可された七人の中に、こんど名誉会員に推薦された藤島敏男氏の名前が見える。いまだから四十六年昔のことである。以上は山岳十四年一号の会務報告に記されている。また秩父宮殿下とウエストン師の入会年月が空欄になつてゐるが、これは名誉会員推薦年月が即ち入会年月である。

城氏が会員番号一ということばさきに述べたが、ついでに物故名譽会員の会員番号を示すと別表の通りになる。これは最初からあつたものではなく、明治四十二年五月に会員章が作られたときできたものである。

七人の発起人のうち武田久吉(五)

山川 黙(七)の両氏はお元氣だが、会員番号六は、大正十五年一月一日、四十一才の若さで病没された梅沢親光氏である。

なおこんどの名簿には一九六〇年版

物故名譽会員の

氏 名	番 号	入会年月	推薦年月	逝去年月
秩父宮 雍仁		1950. 4	1950. 4	1953. 1
Weston, Walter	249	1910. 3	1910. 3	1940. 3
志賀 重 昂	37	1906. 6	1911. 6	1927. 4
大 平 晟	31	1906. 3	1919.11	1943. 1
白井光太郎	70	1906. 5	1919.11	1932. 5
城 数 馬	1	発 起 人	1920. 2	1924. 2
小 島 久 太	2	発 起 人	1935.12	1948.12
高 野 鷹 蔵	3	発 起 人	1935.12	1964. 9
高 頭 仁 兵 衛	4	発 起 人	1935.12	1958. 4
辻 本 満 丸	20	1906. 2	1935.12	1941. 4
加 賀 正 太 郎	151	1908. 5	1950. 4	1955. 8

と同様物故名譽会員の没年順に記してあるが、一九五二年、五七年版のように推薦年月順にするのがよいのではないかと思う。ただし秩父宮殿下は別である。殿下の会員番号は調べたが不明である。(四〇・一一・一三)

セント・エライアスの新登頂

B. Everett, G. Benner, J. Davidson, D. Eberl, L. Story, W. Van de Graaf, J. Alt, E. Bernbaum, J. Given, D. Redmond の一〇人からなるヘーバード山岳会隊が、未登の南西稜からエベレストの第四登(米第二登)を行なった。登頂は最初の六人、二五時間要す(一九六五・七・三〇)。ピトン五六本、固定綱一五〇〇〇五人が四四二〇mの地点で雪崩にやられたが、大した怪我はなかった。(AAC News, No. 86)

◆カフカズのこと◆

袋 一 平

一、カフカズ登山遠征

ソ連の山にのぼりたいがという相談を私は多数の個人と団体からうけた。答は同じである。ソ連の山の事情はヒマラヤとかアルプスとかとは違う。登山の道は交流以外にはないと思う。だからその用意をととのえて、先方と交渉すれば、可能性も出てくるのではないかと。

多数の個人が、あるいは団体の代表者が、ソ連アルピニスト連盟に交渉をはじめた。これはいささか強引に過ぎたようである。どこの国でも、一本にまとめて、話を進めるのが、いままでの例なのだから。連盟もめんくらったことだろう。

「用意をととのえる」というのは、要するに窓口を一本にしよるということなのだ。これは日本の岳界では不可能であることがわかった。そこで私は自分一本にしよることにきめた。自分が窓口になって、比較的動機が純粋なアルピニストたちをおくることができたら、後進のために、ソ連の山への道もひらけるだろう。

一九六三年秋、トビリシでグルジア山岳会のメンバーに会ったとき、はじ

中共隊シヤパンマ峰登山記念切手



めて交流の問題が具体化の一步をふみだした。それまで前進の見とおしははつきりしなかった。イギリス、スイス、フランスなどの古いなじみのお客が順番を待っているのだから。

日本側の私のプランに最後に残ったのは第二次RCCと横浜山岳会であった。もし窓口が開通したら、この二つを一つにまとめて、最初の遠征隊を組織するつもりであった。

しかしRCCはソ連のゆるいテンポに歩調が合わなかった。「カフカズ登山計画概要」という印刷物のなかで、RCCは書いている。

「袋一平氏を通じたグルジア山岳会の連絡がまだ得られない昭和四十年三月に（中略）同人松本によって労働者スポーツ協会を通じての日ソ親善登山の提案があった。委員会および世話人会で検討した結果、後者の線をすすめることに決定した」もちろんこの話を聞いたとき、私はRCCを祝福した。その時分には、私の窓口はいっぴりかれるものや見当もついていた。ただ長年の経験で、自信はあったが、それを人におしつける権利はなかった。

九月のはじめ、トビリシから封書がとどいた。一九六六年の夏、カフカズ登山に招待することがきまったという知らせである。六五年は前からスイス隊十名に割当てられていた。それでゆつくり次年度のプランを練っていたのだという。

RCCはもうその道を歩きはじめた。私はいま横浜山岳会を中心に遠征隊を組織すればいい。この一年あまり、同会のメンバーのソ連の山を研究する熱情には、おどろくべきものがあった。私ははつきりした日本グルジア友好登山協会の代表をおくり出せることを幸せに思っている。

二、一九六五年の活動

ソ連の登山のグレイディングは、いままでIAから5Bまでの五級一〇位に規定されていたが、一九六五年のシーズンからこれに第六級を加えて、国際規格と一致させることになった。はじめは第五級をこなすのが一〇〇名内外しかなかった。昨今はそれが一〇〇〇名を越すようになった。ソ連アルピニスト連盟が国際級への格上げを決定したのである。

さしあたりこの第六級は九ールの頂しかない。バミールと天山とカフカズに各三つずつ。そのうちカフカズの二つはチェトイン・タウ（四三三八m、中部のウシバ峰の北方）の北壁に集中している。六〇〇mの黒い岩壁。一九五七年にヴィイタリ・



アバロフ隊が攻撃して、一〇〇mを残して撃退された。五九年、A・スネサレフの「トルド（労働）」隊がはじめてこの壁をよじのぼった。「トルド」はロシア共和国の労働者のスポーツ統一組織である。

六五年八月、ビョートル・ブダノフを隊長とする八名のレニングラード・スバルタ隊が第二登頂をなしとげた（スバルタ隊は全連邦労働組合統一スポーツ協会）。第六級の壁とはどんなものか、その記録から抜いてみる。

傾斜はほとんど垂直に近い八〇度で、すべすべの花崗岩、大部分は逆層。偵察と準備に五日、登行に五日、計一〇日を要した。一日に一五一一七時間働く。カプロンのなわ梯子、あるいはジュラルミンのあぶみに乗って、ハーケン五〇〇余を打つ。一mに一ハーケン。適当な割目がないところには、一枚岩に特別なボルトを打ちこむ。

準備にはカプロンザイル六〇〇mあまりが壁にかけられた。一時間の行動速度、四m半なんて難場もある。第三日にはたった一二〇m、第四日はもつとひとく、ザイル一本分しかのぼれなかった。

これほどに準備しても、なお登行には五日かかった。七日間（そのうち二日はクライマーたちが壁にとりついていて）、悪天候が雪と烈風。いちばんむずかしいのはビバークの問題であつた。足場がないので、全期間メンバーが一緒に集まったことは一度もなかった。夜がきたら、各人その場でビバークしなければならぬ。松の木の間にでなくて、底なしの上に、ハンモ

ックを吊った。

メンバーのひとりにK・クレッコという煙突掃除職があつた。この人は去年（六四年）バミール南西部にあるピコ・エンゲルス（六五五〇m）の壁をのぼり、さらにイタリアのグラント・カブチンにものぼった。いずれも国際第六級である。彼は文句なしにマスタ・オブ・スポーツの位をもった。

カフカズの新しい難物はウシバ南峰（四七一〇m）の西壁中央リフトである。この夏（六五年）V・モノガロフの「アヴァンガルド」隊がこれをやった。またチェトイン・タウのもう一つの第六級にU・チエルノスリヴィンの「トルド」隊四名が成功した。

縦走記録ではグルジア共和国クタイシ市のヘルギアニ隊が見事な点をかせいだ。カフカズの最も困難な五〇〇〇m級三ツツシハラ、ミジルギ、ドゥイフ・タウをまたいで、南のアイラマ（四四三七m）から北のミシス・タウ（四四二一m）まで縦走した。天山では地質学者B・ストゥディンのカザフスタン「スバルタ」隊がバヤン・クルンビエト・ガザフスタン「大理石の壁」のむずかしい六〇〇〇m級縦走をやリ、バミールではA・ビヤンコフのウズベク隊五名がさんざん粘ったあげく、コムアカデミヤ峰（六四三九m）南壁の初登頂に成功した。またV・ネクラソフ大尉のソ連軍隊一五名がコムニズム峰（七四九五m）に八月十七日とつぷり暮れからのぼり着いた。

この年度の対外関係では、ソ連岳人がユーゴスラヴィア、オーストリア、ブルガリアの山にはいり、スイス隊がカフカズにやってきた。まもなく連盟の審査委員会がはじまって、この年度のアルピニズムの成績を検討し、金、銀、銅三賞のチャンピオンを決定する。

(完)



中共のエベレスト登山記念切手

〔六十周年記念山行〕 報 (II) 告

山形 支部合同 宮城

もと蔵王鉱山の宿舎を改造してニュー蔵王山荘というのが、坊平の下に開業している。堂々たる山荘だが、その前庭に十一月二日、JACの新しい会旗が翻翻と飄がえっていた。

山形・宮城両支部合同のJAC六十周年記念山行のベースであることを告げる旗であった。

最初は福島と三県合同で行なわれる計画であったのが、都合で福島が参加できなかったのは惜しかった。

東京からは残念ながら小生一人が参加、宮城からも山形からも、それぞれ自動車で会旗の下に会員が集つてきた。出席者は後記の通りだが、山形からは後藤(幹)宮城からは北川の両支部長はじめ伊達さん、後藤(恵)さんなど支部では長老組にはいる会員の顔も見えて、懇親前夜祭は盛会だった。

蔵王をへだてて対峙する両支部だけに会員相互の交流、協調も強く、若い会員諸君の話も共通するものが多く、このような会合が今後、他の支部との間、また各支部相互間に持たれるといいと痛感。

晩秋の色濃い山荘の夜はかくて楽しく更けて行ったが、翌日はもはや初冬

の粧いをこしらへた中丸山に登ることに決めた。小生もその後に続いて登りたかったが、時間がとれないので、北川支部長の車に乗せてもらって、早朝一足先へ山荘を出発。エコーラインを越えて仙台に下った。

刈田峠を越える時は酷いガスで視界ゼロだったが、汽車で白石付近を通過した時、蔵王は連山雲ひとつない快晴だったから、記念山行は成功であったと思う。両支部長はじめ支部のみなさんに御礼を申し上げておく。

参加者 北川正次 伊達篤郎 吉野慎造 桂島一郎 庄司駒男 星勝雄 (以上宮城) 後藤幹次 後藤恵治 五百川佑二 音山信次 水沢寧一郎 加藤達雄 本間平治郎 佐藤達三 村上勝太郎 岡崎善七 蒲沢陽子 (以上山形) (渡辺公平・記)

越後支部

佐藤 一栄

越後支部は例年、文化の日に記念登山会を催してきたが、今年は恰好のタイトルで行事を飾ることができた。ただし、当日は時雨らしからぬ激しい雨で、八十名に近い参加者は登山口の宿に缶詰となり、雨に煙る遠い紅葉の山肌を眺めながら、腕を撫すといった山行に終ってしまった。

椿山荘の記念パーティーで松方会長が「日本山岳会が、常にやりつけないことをしたので、雨が降ったのではないか」と笑っておられたが支部も同様、その御相伴にあつたのかも知れない。

会場の巻機山は、新潟と群馬の県境、谷川連峰の隣りに、一九七〇米の巨体を聳えさせており、織物の神「機姫」の伝説と、巻機権現の火渡り行事を今に伝えて、古くから信仰の山として知られてきた。温古之葉には「木材

と葉草に富み、上古より神山の称あり」と述べてあり「佐保姫の巻機山に纏る絹は、さながら雪の衣とぞみる」と古歌の表現も優美である。

最近では登山者が増加し、学校山岳部のヒュッテなども数ね建設され、毎年いくつかの登山大会が催されるほど賑わっている。

見事な滝を連ねた沢登りコースや明快な尾根道、それに眺望に恵まれた縦走路など、変化に富んだ山歩きができるし、頂上部の大草原は池塘と高山植物に彩られて、明るく、綺麗な山という印象が強い。

十一月二日の午後四時、上越線塩沢駅前に集合、一行は貸切バスで約四十分の清水部落へ向う。鮎で有名な魚野川を渡ると、金城山を前衛とした巻機峰々が、赤茶色の大地から上長嶺を過ぎ、登川に沿った山峡の車道が次第に高度を上げてゆくと、対岸の山壁が近づくかと迫り、車窓をかすめるカエデやイチョウの原色が、眼を洗うように清々しい。

清水は登川最奥の部落で戸数三十六。昔は越後から上州へ出るときに、ここで一泊して清水越えの準備をしたといわれる宿場であったが、今は巻機登山の好ベースとなり、「巻機山宿泊所」の看板を掲げた農家が八戸ある。一行はここでヤマゴの小野塚照治さんほか二戸に分宿となった。小野塚さんは山岳会の会員でもあり、巻機山の開拓に尽くした登山者には馴染深い人である。

夕食はキノコや山芋、ぜんまい等の山菜料理に益がはずみ、食後は本部からおいで願った講師、山崎安治氏の講演、藤島支部長の話、そして、私は明春、越後支部創立二十周年記念行事として実施する「新潟県境全縦走踏査登山」の計画を説明した。就寝まじわに

後陣の二十名ほどが到着して、またひとしきり歓談となる。

こうした登山会では、ふだんかけ違つて、なかなか逢えない人々の顔が集って楽しい。山仲間とは嬉しいもので顔を合せれば、まるで昨日の続きのようには話はずむ。

つい飲み過ぎでござん様となったが、変り易い秋の天気は、その頃もう、冷たい雨を落していらした。

三日、午前五時、降りしきる雨の音で眼が覚めた。板戸をくると、曉の冷気を袈して雨脚はげしい。空模様の好転を祈り、炉端に膝を抱えて待機となったが、雨は小止みもなく降り続いて、みんなをガッカリさせる。リーダーは天気と時計を睨んで気をもんでいて、遂に登山を断念、座敷に講師を囲んで座談会となった。

午前十一時、参加者全員が、小野塚さん心尽しのなめこの袋をお土産にもらってバスに乗り、名残りを惜しみながら清水を離れた。

上長嶺で途中下車して、無形文化財の「いざり機」を見る。映画「六条ゆきやまゆ」の素材になったといわれる古い伝統の織物で、老婆が魚沼地方の方言で喋りながら、箆を操る風情が好もしかった。

予定変更で余った時間を、さらに金城山麓、曹洞神家の名刹「雲洞庵」拜観に向けた。このたびの登山会のリーダーで、上長嶺に在るの会員、曾根義一さんの骨折りである。深閑とした杉林を透して大きな加藍が建ち、境内には見事な大理石に近代的な感覚で刻まれた十三体の観音像が点在していた。

藤島支部長著すところの「越後の山旅」に「雲洞庵の大理石の観音像は、大平蔵先生、高頭仁兵衛翁寿像の作者、羽下修三先生の原型で、女性化された観音石像は気品のある素晴らしい美しさ、こうした新感覚の仏像が古刹にあ

って、驚くほどの感銘を与えている」とあるが、正にその通り。肌も露わなスタイルと、およそ宗教的なイメージとかけはなれた美女の表情は、むしろエロチシズムさえ湛えて沃しく、ルネッサンスの彫刻のように美しい。一同は坊さんの案内で本堂、禅堂などを見学し、四百貫の大鐘をついて、ひとときは善男善女の境地にひたった。

塩沢町へ戻ったところで、此処でも当地在住の会員、室井俊夫さんの配慮で、この地が生んだ文人、鈴木牧之の牧之記念館を見学した。秋山紀行、北越書牘など、郷土の風俗や伝承を記した牧之の書は、地方文化の開発に大きな貢献を果たしたといわれている。

漸くときれとぎれになった雨の中を、登山会は同所で閉会解散となり、同町、尾張屋のはんばきぬぎで、登らざる登山会の憂さを晴らす仕儀となった。

富山支部

若林啓之助

十一月三日を中心にするにはやゝ早かったが、当地方の時期では紅葉を楽しむ最適期として十月二日、三日をえらんで立山雷鳥沢のベルグハウスで行った。もともと最近、本当に具体化してきた室堂黒部の黒四ダムを結ぶ立山ルートの準備工事に取掛けたというので、自然保護の立場から、飯工作工事の実態を視察することも兼ねて、その時期を選んだわけである。

幸に二日間とも近來まれな快晴にめぐまれ、紅葉こそ台風29号のために全部、落葉して蕭々たる冬の気であったが、新雪を頂いた連山は初冬の気に満ちて楽しい山行であった。二日は午後富山発の電車で出発し、三時過ぎに室堂平に着いた。その後直ちに立山ルートの視察を実施しながら、室堂から玉殿岩

屋、浄土沢へ降って雷鳥沢のベルグハウスへ日没頃入った。ベルグハウスは我々一行の他にはほとんど宿泊者もなく、食堂での懇談は全く山小屋を独占しているようなもので、楽しい話題の内に暮れて行った。

◇

現在、立山は富山県の観光開発の目的として大きく変容を来しつつある。すなわち既に室堂平の入口までバスが通じるようになり、更に黒四ダムへ主接にトンネルを明けて通じようとしている。このような現実の中で、どうやって自然保護を進めて行くか。もはや自然保護の観念論や、概念論ではすまされない段階に来ているのである。従って先程までに見て来た工事の実際情に則って、具体的に自然の保全をどのように推進して行くか。一つ一つの実績を示して、それを実行してもらいより他には手がない。この点から支部の意見を自然保護協会に原案として提起して、これを工事施行会社及び監督の立場にある県知事並びに厚生大臣に意見具申するのが最も有効な方法であろう。こうして取まとめた意見が次の六項目になった。

◇

一、旧開電道路の整備について

室堂平上にある旧開電道路は現在三メートル幅であるが、これをズリ拾用ダンブカーが通る一車線最低幅四メートルに拡張するため杭打ち測量中で、四メートル幅の外側に路端石積のりと測溝が設けられる。従って道路として占有される総幅は五メートルとなる。

この点、現状より相当広くなるが、実用上止むを得ない点もあるので、道路以外の部分に破壊が及ばないように極力留意してもらいたい。

二、浄土沢部分の道路延長工事について

旧開電道路を浄土沢へ延長してズリ拾場に至るものであるが、既にブルドーザーで工事中であり、就中、法線が浄土沢の屋根状部分につけられているため、相当な自然破壊以外に、この点についても道路以外の部分に掘開した残土を積み上げて植生を損じないように、特別の注意を払った工法で、工事を行なわれた。

三、工事用道路と登山道との交差点について

この点については特に登山者の危害予防上の問題が大きいので、登山道に短絡道を設ける案もあるようだが、これは反って自然の荒廃を多くするので夏山最盛期には二点の交差点に交通整理員を常駐させ、登山者を厚生省の園路に従って室堂へ誘導し、更に一ノ越への登山道に入らしめる方策が最良である。

四、ズリ拾場の位置について

玉殿岩屋下のズリ拾場は室堂方面からの景観上は完全な死角に入るので適当な位置である。浄土沢本沢のズリ拾場は室堂方面から正面になって目立ち易く、また沢の出水により流出する危険性が多く、できる限り玉殿岩屋下へ併合した方がよい。

五、本トンネル入口付近について

考えられる最も目立たない場所になつていて問題には少ない。

六、パッチャープラントの位置について

室堂に近く、積雪も多い場所なので適当とは考えられないが、他に適地がないので止むを得ない。

現状は以上の通りであるが、工事実施者に自然の破壊を徹底して防除させるため次の点を勧告する。

イ、工事施行会社の命令系統に従って自然保護を徹底せしめる。
ロ、工事者および一般登山者に立山

ルート工事に対する厚生大臣の認可付帯条件を周知させるため必要条項を要所に掲示して徹底せしめる。

1 工事用の仮工作物はできるだけ集約的に設置し、その周辺の景観の保護につとめること。

2 工事関係者が高山植物等採取したりすることのないよう関係者を十分指導監督すること。

3 工事の施行に伴う支障木の伐採は必要最少限度にとどめること。

4 切取、盛土(埋め戻し部分を含む)および残土拾場法面は、現地産の植物で緑化修景を図ること。

5 自然保護および美化清掃等の国立公園管理については積極的に協力すること。

6 工事の施行に当たっては、国立公園利用者の危険防止につとめること。

以上に書いた意見は既に自然保護協会の決議になって関係方面に提示されている。

◇

翌三日も快晴で、雷鳥沢から別山乗越、雄山へ縦走する班と、奥大日往復する班に別れて、それぞれ新雪をふんで出発した。

ところで、先の自然保護に関連して雄山頂上の神社社務所が、今秋鉄筋コンクリートに改築され、それが室堂方面から見ると山頂上のホテルの如く、稜線の景観は一変しているのを発見した。これは又一問題である。最近の山での工事はヘリコプターを使ってセメント打等を行なうので、夏山以後に急に出現したような姿で、我々も唯然としてしまった。この件についてはどうやって解決して行くか、また、自然保護協会にも知らせねばならぬだろう。立山もすっかりしているところんだ。開発が突発するので富山支部もうかうかしていられないのが現状である。

(注・参加者後報)

中共登山隊クングル
チュベ登山記念切手

石川支部

亀田と三次

石川支部の六十周年記念集会は、恒例の岩間懇親会をもってこれに替えることとし十一月六日、七日白山岩間温泉元湯泉宮ヒュッテで開催した。本部から御出席の沼倉氏を迎え会員十五名参集、北国の晩秋には珍らしく前日の雨もからりと晴れて紅葉の色も一入の眺めにそれぞれ電車、バスを利用する者、自家用車で来る者、尾漆川に添って岩間へと懐かし道山に入った。岩間温泉口の湯からは徒歩で約一時間、岩間ヒュッテに全員揃ったのは秋の日の暮れるに早く夕陽がせまっていた。湯ノ谷の川原に湧出する温泉の露天風呂で身体を暖めて夜の宴に入る。今年も亦ナメコ、サワガニ、イワナなど山の幸に笹の露を汲み交わし懐旧談に花が咲いた。沼倉先生から本部六十周年記念行事の模様や本部の近況など承ることが出来たのは地方会員として嬉しかった。宴酣となれば白山のかんこ踊り民謡の数々さては母校の校歌に山の夜は賑やかと更けにいった。この集いつの頃からか誰が云ったかアイヌ熊狩を偲んでイヨマンテの夕と名づけられていた。外は満天の星空、満月に近い月光は星をあざむく明るさにヒュッテを出て二度三度露天風呂に

ひたるものこの会場の魅力である。

翌朝はここから湯ノ谷右岸中腹につけられた小径を山越して、中ノ川の川原に下りたところにある特別天然記念物の噴泉塔群を探訪した。その頃は朝からの曇り空も晴れて日も照り出した。ヒュッテに戻れば屋敷まで各自思い思いにナメコを採ったり、溪流に糸を垂れてイワナを釣るなど楽しんだ。この懇親会は去る二十九年今は岩間口ノ湯にある山崎旅館がここに新築された年、辻村太郎先生、深田久弥先生を迎えて開催したのがたしか第一回であったからもう十回余にも及んでいる。支部創立も来年は二十周年に当るので来年は本部の先生方にも多数お出を戴き又全国の支部へも御案内して一つ盛大に催してはとの話も出て、昼食後解散となる。午後は雨となつたが、一きわ美しく見られる紅葉を眺めながら下山の足を早めた。

山のさち紅葉流るゝ湯のかをり 昌孝(参加者)

支部長・磯野三郎、副支部長・小林雄次郎、増江俊三、馬場勝嘉、上田銃一、池田知幸、河本俊彦、木村 桂、香村金治郎、畑中俊作、橋 礼吉、穴田琴美、真田昌孝、西田貞夫、亀田与三次、沼倉寛二郎(本部より参加)以上十六名

ローガン南校初登攀

一九六五年八月七日、Richard Long, John Evans, Frank Coale, Allen Steck, Paul Bacon, Jim Wilson の六人が、三二日かけて南校から中央峰と東峰へ、翌八日西峰に登った。一度に三峰へ登ったのはこの隊が初めてである。

C3(3686m)の建設に二三日間、それからあと頂上まで八日かかった。雪上では氷斧の代りに鋼製庭園用特殊十能を使用した。これは絶対の必需品であった。(Garden-variety shovel) 固定網は約七九〇〇m使用。(AAC-News, No. 86)

- 741 -

(5)



記念山行(続)

大分支部

・日時 昭和四〇年一月七・八日
・場所 九重山荘、榎有恒氏と懇談会
・コース (七日)宮原線阿蘇駅—夫
婦越—石原—湯坪—筋湯—
九重山荘—筋湯(泊)
(八日)筋湯—牧の戸峠—大

・参加者 加藤数功他六名
★概要 大分発七・四〇、阿蘇釣
駅下車(一・〇〇)、草原の大分、熊
本県境を歩く。五〇分も歩くと展望の
利く尾根に出て中食をとる。加藤氏よ
り周囲の山々について詳しい説明があ
る。西風が強く、うっかりすると吹き
飛ばされそう。涌蓋(わいた)山が
だんだん近づく。ひなびた温泉宿、は
げの湯の上をすぎると、夫婦峠は直ぐ
である。峠には林道が通っており、あ
せびの列が道の境界を作っている。熊
笹の中の木立は僅かの紅葉を残し、秋
の深さを知らせてくれる。

涌蓋山の山麓を巻いて再び草原に出
ると、前方に温泉の湯煙が立並び、遠
景に九重連山の黒岩、三俣が望まれ
る。牧場の横を通り、石原部落より車
道を湯坪まで歩く。一五・二五湯坪に
着いてから九重山荘に電話をするが、
榎氏と福岡支部の一行はまだ着いてお
らず、筋湯の宿に着く。一風呂あびて
一九・三〇降りはじめた雨の中を車で

九重山荘にむかう。

榎氏を囲む懇談会は自己紹介にはじ
まり、榎氏の日本山岳会の歩みについ
て講話があり、その後懇談にはいる。
福岡支部の招きで地元として参加をお
願ひしたわけで、約二六名の会員は終
始いかなかな懇談のうちに記念撮影を
行なったあと二・三〇解散し宿に返
る。

八日は降ったり止んだりしていた雨
の中を榎氏と福岡支部会員、それに当
支部もお伴をして牧の戸峠に登り、九
州横断道路に出て解散した。

福島支部

当支部の記念山行は当初、山形、宮
城両支部と合同で蔵王連峰にて行う予
定であったが、都合により変更、十一月
二・三日、吾妻山に於いて伊藤支部長
以下二十五名が参加して行なわれた。
記念集会は十一月二午後五時より
吾妻小屋にて開催。新らしいJAC旗
を飾り祝宴を開いた。

記念山行は翌十一月三日、九時吾妻
小屋発、高山頂上を経て土湯温泉に下
った。このコースは最近標識が整備さ
れた新しいコースで、初冬の降路、
スキーツアーは快適なコースである。
(参加者) 伊藤弥十郎、川又恒一、
二階堂哲三、小畑貞吉、高野喜七、後
藤泰治、吉野尚、二階堂政雄、赤沼
節、古内克己、大内勝男、鈴木義彦、
武藤清次、安藤治、佐田啓一、稲田定
栄、渡辺千代蔵、佐久間啓男、加藤
米、斎藤啓助、斎藤音蔵、河上鏡治、
寺島昭一、相模八郎、二階堂匡一郎。
(以上二十五名)

熊本支部

一、記念集会
昭和四十年十一月二十日(土)熊本
県阿蘇郡南小国村九重山麓の本高原
ユース・ホテルにて一泊、本部から三

田副会長の出席を得て、支部会員十二
名が出席。午後八時から集会を開き、
支部委員馬場猛氏の欧州旅行のスライ
ドを鑑賞しそのあと三田副会長の講話
を聞いた。

(出席者) 三田、三谷、西沢、玉名
首藤、馬場、荒尾、土屋、本田、多
田、菅、仁尾、馬場)

二、記念登山

翌二十一日(日)、三田副会長をはじめ
会員十一名が参加して久住登山を行
った。
午前八時二十分宿舎を出発、牧の戸
峠から登山。午前十一時に山頂着(標
高一、七八八四)。すがもり越経由で
午後一時半頃九重山登山口下山した。
そのあと養の地獄を見物して二時半頃
散会した。

に参加して

成瀬 岩雄

去る十一月七日、秋田支
部の行事である白岩山登山
に参加した。支部の方々六
名の懇切なる御指導によ
り、久しく忘れてかけていた東北の山の
秋色美を味わい、しかも当日は日曜日
にも拘らず「なめこ」探りの姿さん二
人を除いては他に全く人影を見ず、東
京近郊では想像もつかぬ山らしい山歩
きを楽しむ事が出来た。耳に入るもの
は唯、カサ／＼と枯葉を踏みわける音
だけ……。こんな山歩きを身近に出来
る支部の御連中は羨ましい限りだ。

帰途は盛岡経由帰京、その昔、橋場
の宿を朝早く発ち、日一杯かかって田
沢湖へと仙元峠を越えた時の記憶をい
くらかでもよみがえらせたいと思っ
たのだが、今はバスで簡単に越せ、頻り
と谷の方をのぞいては昔の峠路を探し
求めて見たけれど、その跡形すら眼に
止らず、唯橋場の入口の路傍に「橋場
宿場跡」と書かれた棒杭を見出すのみ

であったのは、聊か淋しかった。

大昔、秋田の殿様等は参勤交代の節
は日本海沿いに道をとらず、大曲、角
館、生保内、仙石峠、橋場、盛岡経由
上京したと云うので、僕もかつてこの
峠を歩いて見たのだが、今となっては
唯、徒らに懐古の情を空しうするばか
りであった。

でも翌日は本会の古い会員、赤星平
馬君(会員番号一〇五〇番)の経営す
る小岩井牧場に遊び、久振りで静か
な、平和な牧歌的風景を満喫する事が
出来た。

初雪をいただいた岩手山を借景にし
たこの別天地は、明治二十四年に岩崎
さんが火山岩の多いこの不毛の土地
に、何故、この農場や牧場を開かれた
のか迄知る由もないが、今日となって
は立派に経営も成立している由。

英国仕込みの先代岩崎さんが開場当
時建てられた俵の様な建物や古風な家
具は、如何にもこの土地にマッチし
て、それに古木に囲まれた広大な土地
は「狐狩り」等と云うものは斯んな処
で行われるのではないかと、独り勝手に
想像して見た。それにしても或時期
には、幾多の経営難に遭遇した事もあ
ったと聞いたが、今日まで克く開所以
来の自然美を守り続け、しかも経営の
実績を上げて来た赤星君の不屈の努力
には、茲に更めて敬意を表せざるを得
ない。

天下に富豪多しといえども、流石は
英国仕込みの岩崎さん、何千年来の先
祖の遺産を潰してでも観光とやらの美
名(?)にかくれて古都、名刹を平気で
つぶして行く様な手合の横行する世の
中に、矢張り育ちの違ひは争えない。
御陰で今度の旅は、その昔、名もな
き峠から峠、村から村へと、寂しい東
北の秋色美を求め、寒村僻地を歩き廻
わった頃を久振りに思い出し、終始、
楽しい旅であった。

それにしてもあの時、唯、その名だ
けに引かれて足を向けて「寒ノ背」な
んて云う名の峠を越えた時は、野分の
冷たい風に思わず背をぢぢめ、襟をか
き合わせ、茅の波路を草鞋の足も小走
りに、独り峠路を下ったものだった
が、あの辺りの寒村は今はどうなっ
ている事だろう。東北は今特に貧村と云
われて碌に米も常食に出来ない貧村
で、勿論、宿屋などもない所だった
が、それは芭蕉の「馬の尿する枕元」
を想像さす様な粗末な農家ではあつた
が、あの時、ランブの薄暗い光のもと
で示された家人の温かい人情は、これ
も東北の秋色の「美」の一つとして忘
れ難いものであった。

(四〇・一一・三〇)

お詫びと訂正

会報二四六号二頁、新名譽会員紹介
の囲み記事で、「本会は一九五〇年四
月十九日の役員総会において三枝守博
氏他六氏を名譽会員に推薦して以来十
五年間の長きに亘り……」とありま
すが、これは誤りで、一九五三年六月
に辻村太郎、冠松次郎氏が推荐されて
おりましたので十二年間でした。

(会報一六九号十一頁参照)重要な記
事を間違えましたことをお詫び申上
げ、謹んで訂正させていただきます。尚
四氏の紹介は望月評議員にお願い致し
ましたのが、囲み記事の文には編集委員
の責任においてまとめたものでありま
す。「水を漏さぬ望月氏にしてこの間
違い」との評判がある様ですので念の
ため明らかにしておきます。(松田)

急 告!!

台湾登山入国許可については今後、
在日台湾大使館に総て申請するように
なりました。悉くは次号に申し上げます。
係・大塚博美 電話(四〇三)
三二一一NETにお問合せを。

《六十周年記念山行(続)》



中共隊
ミニヤ・ゴンカール
登山記念切手

★紅葉会に 初参加して★

坂倉登喜子

JACのお茶の水ルーム通いをしていた頃から、時折り静岡から上京される山本朋三郎氏(朋さん)の方が親しみが持てます。が、秋になると鹿の肉を食べる会を催すから是非皆さんで御参加をとお誘いを受けていたが、お休みの関係で行けなかったところ、今秋は漸く休暇がとれて有名な静岡支部主催の紅葉会に初めて参加することができた。

紅葉会と名称は変わっても内容は昔と変りない楽しい集いであることを聞いていたので、寸又峽の紅葉もさることながら、パーベキューの魅力にひかれて、朝も早くから、五時起きをして東京発七時半の東海一号なる列車に駆けつけた。

前夜は朝早く自宅からはバスがないので、今井宅に泊めていただき御夫妻と阿佐ヶ谷から東京駅へ、列車に乗り込むと、古沢さんや中さんがにこやかに迎えて下さった。

新橋で松方会長、小田原で山下さん、静岡で山本さんが乗車され漸く大井川鉄道のおもちゃのような電車で乗

る頃から、やっとメンバーのお歴々のお顔が見られ、参加者名簿も渡されて土曜会の遠足会のような感じがした。途中水害のため二回程徒歩連絡で歩かされたが、上高地の雨期に幾度も道がこわれて歩かされていたので、それ程苦にならないが、むしろ歩いてあの最奥の寸又温泉へ行く観光客の姿が気の毒に思えた。

それにも増して大井川鉄道やバス会社の損害と労苦は並大抵のものではないと思えた。

寸又温泉入口の山荘が今回の会場であったが、立派でムードのある雰囲気は、南アルプス登山口とは思えない程の山小屋であった。

夕食までには少し時間があつたので、温泉郷を通り抜け寸又溪谷沿いに飛竜橋まで廻り、残りの紅葉を賞でながら往復した。

四時半集合で静岡支部の若い会員や井川山岳会他皆さんの設置による青空ならぬ夜空の下にパーベキューが始まり大きな串にされた肉が、皆の胃袋の中へとびこみ液体はふんだんに流れこんだ。

飲む程に酔う程に歌が出て、おでん、おしるこ、こんにゃくなど次々に入、場所が違わうららかに、食べ歩きでは液体をすめられて集いの友みな御めいていとは相なつた。

焼肉の香りが体にしみつく頃漸く山峽の宴は終り、山荘のロビーで座談会が始まった。

松方会長、へそまがり藤島夫人、日高、神谷、村井先生など大先輩のお話や、静岡支部長牧野氏、井川山岳会長などの挨拶があった後全員の自己紹介に移りなごやかな雰囲気に入つたが終始日高先生が話の合間に立上って話をされた様子は如何にも楽しいお姿であった。

寸又温泉に浴して翌朝目が覚めると雨、登山の計画は変更され井川まで皆さんと同行、ここで今井先生方と共に皆と別れて煙草ダムまで入り、赤石温泉に一浴午後天候が好転して青空に浮く、新雪の南アルプスの姿に接し、紅葉と新雪の山を仰ぐ旅を終った。

今回静岡支部より正式の報告があると思われ、山本朋三さんの依頼により感想と共に、現地の皆さまの御努力に感謝の言葉を贈る次第である。又来年紅葉会で会いましょう!!

牧之記念館

をみる

山崎安治

日本山岳会創立六十周年記念の越後支部の親睦登山は巻機山で行なわれることになり、招かれて参加した。十一月二日塩沢駅から清水の部落に到着し、早速藤島支部長とともに講師としてしゃべらされたが、終わってからの懇親会にお酒があとからあと出て大変なことになる。

巻機山は初めてなので、三日は大いに張り切ったが、相憎と朝からかなりの雨のため登山は中止し、北越雪譜にも出てくる有名な雲洞庵と、鈴木牧之記念館を参観した。特に長恩寺境内にある土蔵の牧之記念館をゆっくりと見られたことは、何よりの収穫だった。

牧之の書きこみのある北越雪譜だの、夜職草、永代庚申帖、秋月庵発句集など、遺墨や関係文献が翁の木彫像(井口喜夫作)を中心にずらりと並んでおり、興味はつきなかつた。岩波文庫の北越雪譜が読んだことのない私にとって、翁が画家としてもなかなか腕前をもっていたことをあらためて知った次第だった。

記念館には鈴木牧之顕彰会発行の「牧之」、「鈴木牧之資料集」、記念短歌などを売っていた。「牧之」は会報

二二〇号に小野幸氏が紹介されているが、「鈴木牧之資料集」のほうはまだ会報にも紹介されていないようだ。両方とも牧之に興味を持っている人なら見落せない貴重な文庫である。「牧之」では翁が北越雪譜を出版するまで、滝沢馬琴や山東京伝、京山などと交渉を重ね、実に三十余年の長い努力のすえにやっとと念願を達するといういきさつなどきわめて興味深い。

「鈴木牧之資料集」は、牧之資料として、永世記録帖、秋月庵発句集、滝沢馬琴書簡集、山東京山書簡集、夜職草、永代庚申帖、国姓姓名寄帖が原文で全文おさめられている。秋月庵発句集には文化八年七月の苗場山紀行なども含まれており、これに牧之の伝記と著述解題、年表、地図、および各著述の写真が巻頭を飾っている。まことに立派な力作である。いずれも昭和三十六年の発行だが、まだ残部があり、「牧之」は頒価六百円、「鈴木牧之資料集」は七百円、新潟県南魚沼郡塩沢町公民館鈴木牧之顕彰会にて申し込めばわけてもらえる。

記念館からまた塩沢町の尾張屋という料理屋でお酒となったがなにしるこちらには一人、相手は大勢なのでなかなか苦戦、塩沢駅まで車で送ってもらい、午後三時何分かの急行によりやうく間にあった。藤島支部長はじめ越後支部の方々にいろいろお世話になったことをここでお礼申しあげる。

◇バキスタン登山不許可に関する公式通告◇

外務省は十月二十九日付情文二合第三七八六号により、バキスタン外務省口書を送って来ましたが、同国政府は現情勢に鑑み、一九六六年度における外国登山隊の同国遠征を許可しない旨下記の通り連絡がありましたのでお知らせ致します。

★東京支部スキー懇親会のお知らせ

静かな冬の一夜を全館借切りの光徳ロッジで楽しく過ごし、翌日は粉雪の日光湯元グレンデでスキーを楽しむという計画。御家族御友達を誘い合せて是非御参加下さい。往復貸切りバスです。

★左記によりスキー懇親会を催します。

Ministry of Foreign Affairs,
Karachi, 21st October, 1965
No. FEA (P2J)-2/28/65
The Ministry of Foreign Affairs presents its compliments to the Embassy of Japan and has the honour to state that, in view of the present situation, the Government of Pakistan regret their inability to grant permission to Foreign Mountaineering Expeditions who have requested for permission to scale various peaks in Pakistan during 1966.
The Ministry avails itself of this opportunity to renew to the Embassy the assurances of its highest consideration.

▼キンヤン・キッシュ（一九六五年）

東京大学カラ
コルム遠征隊

（者）
部旨（編）
去支要
は、東京
これ、の
日で、の
★17会
★11水
★13で

会報二四四号に、吉沢一郎氏が要点をかいつまで書いて下さったので、東大カラコルム遠征隊の概要をご存知のことと思いますが、現地より隊員も帰国いたしましたので、本隊の行動をまとめて報告いたします。

本遠征隊は、東大運動会スキー山岳部及び東大山の会が学校当局の協賛を得て派遣したもので、メンバーは白木博次隊長（東大教授）、石川信義副隊長以下隊員二名である。

東大としては、二度目の海外遠征であり、第一回のバルトロ・カンリ遠征の経験を生かして、一層困難な山を目指そうと、三つの未登峰を列記してバキスタン政府に登山許可を申請した。その結果、一九六四年二月末キンヤン・キッシュの登山許可が通告された。キンヤン・キッシュは、ヒスパル水河の北岸にある標高七八五二メートルの未登峰である。

今回の遠征は数々の問題にぶつかった。その最初のものが、バキスタン政府からの五月一七日付の登山許可取消の通知であった。これは白木隊長等が現地交渉にあたった結果、幸にも五月二七日再許可を得ることに成功した。しかしこのため、我々が当初予定していたよりも半月近く隊の進行が遅れてしまった。この半月の遅れは後々までたたり、我々の隊が数々の困難にぶつかる間接的な原因となった。

再許可入手とともに、ストップしていた隊の活動が再び始まり、六月一日全隊員と全荷物がラワルビンディへ

集結した。

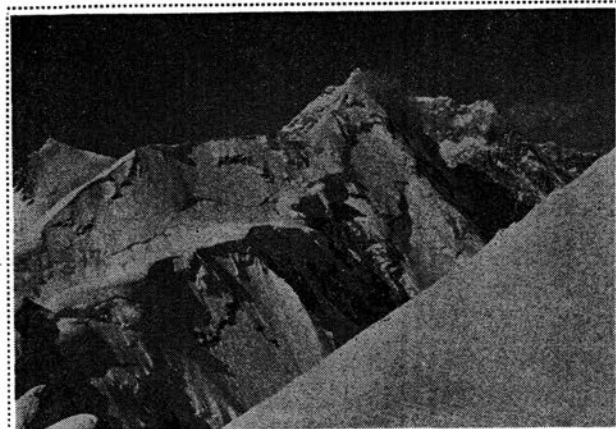
ギルギットへの飛行機は連戦時体制のため飛行回数が少なく、荷物の輸送が進まず、先を急ぐ我々は気をもんだが、それでも、六月一七日ギルギットより五名の隊員がナガールへ向かいジープで出発することができた。

翌六月一八日、石川以下四名の偵察隊は、三十人の人夫をつれキヤラバンに出発。四日目はキンヤン水河に入り偵察のベースキャンプを作った。

キンヤン・キッシュは、一九六二年英国バキスタン合同登山隊が登頂を試みている。

彼等は南稜を末端から忠実に辿ったが、不幸にも五九〇〇メートルの地点で二隊員が墜死し、敗退している。

その記録によると、南稜は非常に長大で、難かし、いらいといることであつた。そのために、我々は他のものと容易なルートを見出して登路しようとしてキンヤン水河の偵察を行った。しかし、キンヤン・キッシュの西面及び北面は、すばらしい壁に囲まれており、登路として使用できそうなルートは全く無く、結局、英バ合同隊のつた南稜をルートとすることに決定した。



白木隊長以下隊員八名、連絡将校、人夫二四三人からなる本隊は、六月二四日ナガールを出発。キヤラバン四日目の六月二七日に、南稜末端のヒスパル水河を見下ろす草原にベースキャンプを建設した。高度三八〇〇メートルである。

ベースキャンプ建設後、隊の運行計画を検討した。長期気象予報によると、七月中は天候も比較的安定しており、七月末には猛吹雪が来るということだったので、登頂目標を七月二四、二五日に置き、かなりのスピードで登る計画を組んだ。前進キャンプは当初七つを予定していた。

BCからC1へのルートは雪のな

いガララの斜面を登る安全なルートであり、一般人夫から残した特選人夫二五名によって輸送を行った。

C1への輸送期間中、七月三日、白木隊長・小倉隊員は帰国途中、キンヤン・キッシュの南稜を登る途中、六月二七日に、南稜末端のヒスパル水河を見下ろす草原にベースキャンプを建設した。高度三八〇〇メートルである。

ベースキャンプ建設後、隊の運行計画を検討した。長期気象予報によると、七月中は天候も比較的安定しており、七月末には猛吹雪が来るということだったので、登頂目標を七月二四、二五日に置き、かなりのスピードで登る計画を組んだ。前進キャンプは当初七つを予定していた。

BCからC1へのルートは雪のな

いガララの斜面を登る安全なルートであり、一般人夫から残した特選人夫二五名によって輸送を行った。

C1への輸送期間中、七月三日、白木隊長・小倉隊員は帰国途中、キンヤン・キッシュの南稜を登る途中、六月二七日に、南稜末端のヒスパル水河を見下ろす草原にベースキャンプを建設した。高度三八〇〇メートルである。

ベースキャンプ建設後、隊の運行計画を検討した。長期気象予報によると、七月中は天候も比較的安定しており、七月末には猛吹雪が来るということだったので、登頂目標を七月二四、二五日に置き、かなりのスピードで登る計画を組んだ。前進キャンプは当初七つを予定していた。

BCからC1へのルートは雪のな

以後隊は二名、石川副隊長が隊の責任者となった。C1から先は七名のハイポーターと隊員ですべての活動を行うわけであるが、ナガールでやとったハイポーターは雪上でまともに動ける者は一人もおらず、C1で雪上技術訓練を行ってなんとか使うことにした。

キンヤン・キッシュ南稜は予想していたように非常に困難な尾根であった。複雑な雪庇が張り出したやせ尾根の部分が多くその上、登り降りが激しい。前進してもなかなか高度がかせげないのにはがっかりした。しかも、長大な稜線の間には「ブルスヘッド」「オーガ（鬼）」「カニのハサミ」などと名づけた殆んど垂直の岩壁が介在し、そのルート工作上に相当の日数を要した。C2から上は、殆んどこの部分に固定ザイルを張った。この山で使った固定ザイルの量は、C2からC8まで三六〇〇メートルに及んだ。またC2とC3の間にある「ブルスヘッド」の下りには、岩壁の頂上より基部までケーブルを張り、これに荷物をぶら下げて輸送を行った。

七月一七日に至り、前進ベースに予定していたC4を高度五九〇〇メートルに建設した。ここで前進キャンプの進み具合、上方のルート困難さなどを考え、七月二四、二五日のアタックは不可能と判断し、七月末悪天候後にアタックすることに計画を変更、新たに下から食料を補充するべく輸送計画も手直した。

七月末の悪天候は、予報だと三日間ということだったが実際は十日間続き、この間全員C4へ完全に閉じ込められた。このため、食糧の不足を考慮せねばならなくなった。そこで再度スケジュールを変更し、食糧節減のため四名がBCへ下り、残りの八名によってC7・C8を建設、アタックすることにした。

八月八日行動を再開したが、八月に入ってから天候は悪く毎日雪のちらつく日が続いた。しかし、雪の切れ間をぬってC6・C7と七〇〇〇メートルの稜線にキャンプを進め、八月八日に至りようやく仮設のC8を建設し、あと二日の好天があればアタックできる体制となった。天候も前日より落着き始めた。

中村隊員の遭難は八月一九日午前一時二〇分に起った。同日仮設C8を出たアタック隊二名とC7を出たサポーター三名が合流、C8を作るべく三角山のナイフリッジ上を登っている時、七二〇〇メートルの地点で、突然トッブとセカンドの足もとから雪崩が発生、トッブでラッセルをしていた中村隊員は、その雪といっしょに高度差二〇〇〇メートル以上あると思われる壁を墜落行方不明になってしまった。

一二時に石川登攀隊長とのトランシーバー連絡が、捜索活動を中止。全員下山し、下から捜索を行うことを決定した。ただちにBCにいた四名が、中村隊員の落ちたと思われるキンヤン水河側の枝水河の入口にテントを設営、捜索にあたる一方、高所にいた七名の隊員はただちに下山を始めた。

二二日には石川を含む三名が連絡のため帰途につき、残りの者は捜索を続けた。しかし、約一週間わたる必死の捜索にもかかわらず、手がかりは全くなく、そのうえ二日から再び天候が悪化し、新雪がすべてをおおいかくしてしまつた。やむなく本隊は八月二七日BCを撤収足どりも重く帰国の途についた。

最後にこの紙面をお借りして、本遠征隊派遣にあたり御協力をいただきましたことを感謝いたしますと、中村隊員の遭難によりたいへん御心配をおかけしましたことを深くおわびいたします。

（文責・牧野内昭武）



Matterhorn

登頂百年と 観光国策

松方三郎

本文は「自然保護」(40・8・15)に出ていたもので、筆者と協会の許可を得てここに転載した。(編者)

ウィムバーがマッターホルンに登った話は日本の子供でも知っている。マッターホルンの山代表みたいな、巨大な岩のピラミッドであること、そして、ほかのアルプスの頂上がほとんど登られていくのに、マッターホルンは、その間にあって長く抵抗した山であったこと。こうした事情がこの山の頂上に誰が最初に登るかは、山登りの社会の中だけの関心事ではなく、広く一般の人々の間の問題であった。

く、人々に親しまれた物語となった。ヨーロッパの国々の山岳博物館にあれば、例外なくウィムバーの肖像にめぐりあう。マッターホルンにいたっては、チョコレートマークまでになっているから、アルプスに行ったことがなくても、絵か写真を見ればすぐその山とわかるのである。

山登りの方からいえば、今日ではもはや、ウィムバーの登ったルートは難しい部類に入っていない。しかし、今日でも案内料金はAクラスなみなのは、一に全く、この山の絶大な人気から来ている。

ところで今年(一九六五年)は、そのウィムバーの初登頂から百年になる。登頂は七月十四日であったから、この日を中心に地元のツェルマットでは、記念のパーティーの計画があったり、ロンドンまで出張してスイスのアルプス観光展のようなものがあったり、なかなか賑やかであった。

しかし、マッターホルンについては、山が山であるだけに、今日までいろいろな問題があった。その中で一番の大問題は何んといっても登山鉄道敷設の一件である。

場所はいタリアとスイスの国境に跨り、南に北イタリアの山岳地帯を見下ろすと同時に、北面と東西両側は、四千メートル級のアルプスの全峰が屏風のように連なっているのだから、展望台として、この山の頂上に及ぶものは少ない。企業家がこの山を放ったらかしておくといい。同じアルプスのオーバーランドの方では、ユングフラウ登山鉄道建設が進んでいた時代、つまり、山を見ればトンネルを掘って電車を通す、それで金儲けをしようといった風潮が世の中に強かった今世紀の初めころのことだ。今日のスイスからでは、考えられないことだが、そのスイスでも十九世紀末から二十世紀初頭にかけては、機械万能的な一時代があったので、山の中にやたら大きなホテルを建て、風致を台なしにしたりしたのも同じ時代のことだ。

マッターホルンも、一つ大々的に登山鉄道をかけて、大いに稼ごうという話になった。話になっただけでなく、どんどん具体的に計画が進められていった。建設費は一億五千万フランというのだから、当時の企業としてはけた外れに大きなものであったに相違ない。ほかの山ではないから、乗って行った人は帰りは乗らないわけにはいかない。そこで往復運賃はいくらと、年間何万の人が乗って純益はいくらと、すっかり皮算用もでき、株主の見当もついて、政府の手を通して、いよいよ議会に出るという段取りまでこぎつけた。つまり鉄道敷設の権利を国からもらったが、許可をもらうしなければならぬのである。ところが、肝心の議会の方は、どう丸めこまれたのか、大賛成ということになって、利権をやってもよいことになってしまった。

世間というものは、どここの国でも同じことらしく、事がそこまで運ぶまで、つるつる賃金におかれていたのだが、国会が可決したと知ってから、奮然として立ち上った。国中が騒然として反対の声を挙げただけではなく、ヨーロッパ各国の新聞までが、反対の言論戦を展開したのだから、建設計画は、手続の上でストップしただけで、実際には全く緒につくことなくして、雲散霧消してしまった。

一方ユングフラウの方も、頂上までトンネルを掘る案が世論におされて変更の余儀なきに至って、今日みるように、ユングフラウ・ヨッホに終点をおくという計画に変更せざるを得なくなつた。

つまりスイスならびにそれをとりま

く国国の良識が、マッターホルンを救った。ユングフラウを救ったということであった。

しかし、これで問題が解決したわけではなかった。五十年後に再び同じような計画が現れたのである。今度はイタリア側からの計画だから、スイスもじだんだんで口惜しいが何ともならない。国境にたっているマッターホルンである以上、これは致し方ないことなのであった。

イタリアの計画は国境線テオドル・パスからフルグ尾根にロープウェイをかけるという案で、頂上部分はエレベーターで山の中を上る、といったような計画だった。これで高層気象観測をやって、国際航空の安全に寄与するなどという能書もついていよう。と、外からではものをいうにも遠慮があり、この戦争は最初から苦戦と心配されたのである。

しかし反対は驚くべく広い範囲にわたって起った。ロンドンの「タイムズ」紙上に二、三年前日本にも来たノエル・バーカーが反対の投書をしたのはこのときのことだ。バーカーは当時、労働党内閣の燃料相の現職にあったのだから、思い切ったことをするものだ、と、私達は驚いたものだ。イタリアの国内の問題に対しては英国の政府の現職の閣僚が反対意見を述べるのだから、しかも個人の資格でものをいって、としてみれば、これは相当思い切ったことだといわねばならない。バーカーにいわせれば、マッターホルンは地図の上ではイタリアとスイスの国境に跨った山には相異なるが、この二つの国が自由にできる財産ではない。マッターホルンは天下のマッターホルンである。それほどこの山は世界各国の人々に愛惜され尊重されているのだから、他国人たる英国人でも、当然ものをいって

よい、という気持なのであったと思う。山岳博物館などではどこでも「マッターホルン危うし」といったポスターがはってあり、玄関では反対の署名簿がおいてあって、署名を求めているという状態であった。そしてこのイタリアの計画の反対に参加した山岳会は、各国の代表団体三十(会員数合計八二五、〇〇〇人)に及び反対署名名を列ねた個人は十一万人を越えた。もちろんこれら内外の反対陳情や声明はローマのイタリア政府に対して出されたものであった。

そしてこの大反対がイタリア政府を動かして、申請はとうとう却下されたのである。これは正に、マッターホルンを護ろうとする天下の声が、人工と機械との侵略に抵抗して、美事に勝利をした目覚ましい勝利の記録である。

ウィムバーの登頂百年を記念する気持は必ずしも英国の人々の間だけのものでもなく、スイスの人々の間だけのものでもない。もっと広い範囲にわたるものだが、もし今日そのマッターホルンにロープウェイでもついたとしたならば、果してそれ等の人々が、純粹な気持で、この百年の記念集會を祝い楽しんだことだろうか。私ははなはだ疑問だと思ふ。七月十四日の記念パーティーでも、必ずマッターホルンの健在を喜ぶ乾杯がプロポーズされたに相違ない。

五十年前と違う点は、反対がより一般的で、各国の山岳会が足並をそろえて起ったという点だが、ヨーロッパでも、五十年前といえば、山岳会を持っていた国も、英国やスイスとアルプス周辺の国々の幾つかに限られていたのだし、一般の山への、また自然の関心も、今日ほど強くなかったに相違ない。それだけに今度のマッターホルンでの勝利は、かなり天下の大勢を決定したものだと思ふ。つまり、これ

で、同じような計画は一挙に息の根をとめられたとの感が深いのである。しかしマッターホルンの話は、日本の話ではない。お前の国の方は大丈夫かといわれると、余り自信をもって大丈夫だといえないのが本当の話ではないのだろうか。

わが日本自然保護協会など設立以来今日まで、陳情のし通しだ。そのくらゐ今日の日本は、国土崩壊の危険にさらされている。大概の建設という名の破壊は、一般社会の知らぬ間に、手続が進んでいて、世間は、目の前に何ごとかが起って初めて事の重大さを知らされる。陳情に及ぶと、もう総ての手続きは終っている。個人の自由とか、財産権の擁護とか、いろいろお役人の方には拱手傍観に都合のよい題目が整っている。そして行政を監督する立場にある議会は、地方も中央も、自然保護などということを考えたことがないように見える。早い話が最近の参議院の選挙にしても東京都議会の選挙にしても、国土の自然を擁護しようなどという綱領をかけた候補者は一人もいなかった。社会開発とかいう言葉が出て来たが、むしろもう一つさかのぼって、自然を大事にしようというところから出直すことが必要なのではないだろうか。花いっぱい運動とか、国土美化という声はあるが、余計なことを考えるよりは、自然を自然のままに置くことが大切なのではないか。余り盛大でもないコンクリートの花鉢においてある傍らに煙草の吸がらが散らばっている光景などは、どう考えても文明国の姿ではない。

滑にするためにできた法律によって、混乱をさけるためにきめられた一つの土組にすぎない。だから地主が、その土地の所有者としての社会的責任を怠れば、その所有者としての資格を失うというのが、封建時代の歴史の示したところだ。今日でも所有者の社会的責任という観念はむしろ強くなりつつある。今日は時代が違ふから土地を取上げる大名などというものはない。そして一度ある土地の所有者になれば、その権利を放棄するか売り渡さない限り、その土地については、何をしてもよい。ケープルをつけようが、トンネルを掘ろうが勝手だ。醜悪な建物を建てて風致を破壊しても、そこどんな悪くどい金儲けをしても、書かれた法律規則に違反しない限り、誰も何ともない得ない。まず、そういう世の中のようなだが、どう考えてみてもこれで結構だとはいかぬ。

しかし一旦壊すとすると、ブルドーザーなどという大変な破壊力をもった道具ができていくから、今日では一つの山を動かすことも潰すこともできる。全く油断もすきもならないのである。山の中にトンネルを掘ることなども朝飯前になった。日本人の技術をもってすれば、マッターホルンのど真中にトンネルのエレベーターをつけるなどということも、金さえあれば、簡単にやっけるに相違ない。

それだけに、その技術や機械の独走にまかせずに、これをいかに駆使し、また制御するかということも十分に得ていなければならなかったろうが、今日までのところでは、多くは独走型の方が多い。この問題は日本が文明国をもって任ずるならば、慎重に考えるに値いすることだ。

観光国策などということは口にはいいながら、その観光の対象となる大きな自然を自分の手で破壊しているのが

わが日本だが、これで外国からどんな人が来ると思っているのだから、驚くべきことだ。

観光国策はとにかく、日本という国はわれわれの子々孫々にわたって受継がれていく国なのだから、昭和四十年代の日本人が戦争に負けてすっかりぼけ、アメリカに占領されて食糧根性になり、そのために、国土を荒らしてしまつたといわれたのでは、何ともなるまいと思うのである。

(完)

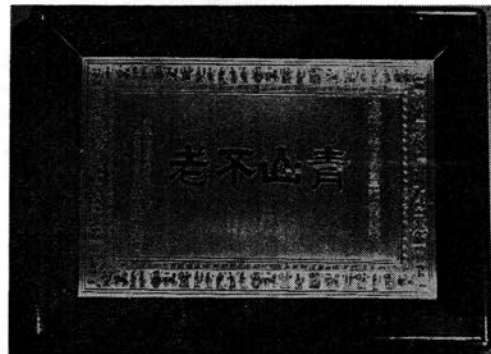
桶
中華民國台灣省
体育会山岳協会より

訪日韓国登攀隊
ベナント

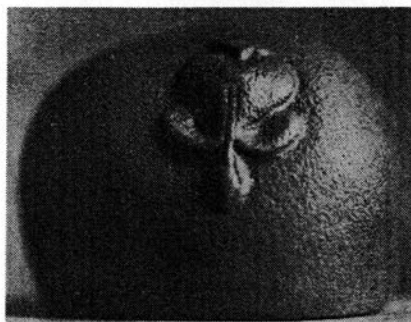


「木彫」桶
会員 永原輝雄氏制作

(会報二四五号参照)



文鎮(青銅)
会員 佐藤久一朗氏制作





北の山・南の山

九月の
と高畑峠
おうあれ

大嵐山

川崎精雄

廿三朝、会津田島
駅で土地の会員小澤清
次郎君と会い、彼の家
に寄らず尾瀬御池行バ
スに乗る。どうも便利
になり過ぎた。白河の
会員室次雄君は都合悪く不参。

松枝岐の十軒手前大桃で下車。沼田街道を離れて左に入る。然し此方が旧道らしい。藁屋根のグシに姓の頭字や菊水の紋を刻んだ民家。飯豊山供養の石碑の下部には「右ひのへまたみち」が読めた。私たちは更に左をとる。

柔い傾斜の草原の登りである。芒、女郎花、野菊の花盛りで虫も鳴いている。白樺を前景に、会津駒から窓明山（一八四二）への稜線が鼻先にある。殊に正面の三つ岩とその下に入る沢に魅力がある。

やがて道が消えた。乗物の発達で塵道に帰った峠は南会津に多いがこれもその一つ。雑木林の中に鬼剣や笹や茅を払いながら行く。峠の東面は急斜面で伐採されている。前面は大風山や浅草岳が望まれる。この峠は東からく七ヶ岳が望まれる。趣き方が下りの気分がよい様だ。谷田で小滝君持参の洋酒で真赤になり、村に出て子供達に笑われた。秋晴のこの

道を歩くのは、二十五、六年ぶりである。

木賊温泉での会合の翌日、小滝君は駒へ。私は〇君と帝釈山、田代山に登り、夜に入って湯の花着。清滝の主人力君には電話しておいたので翌日は大嵐山（一六三五m）へ。

沢の下部のブッシュを刈ったので、そこを登る。沢が尽きると笹の藪で、前を登る人の姿がすぐ見えなくなる。やっと尾根の一端に出ると東側の鱒沢への落込みが岩壁状で、荒沢岳の中荒沢の上部を思い出した。鱒沢から匍い上れば一段と興味があろう。

尚も数こぎで二、三の段階状を過ぎると頂上。その先に木と岩の突起がある。神流川奥の天丸山みたいだ。力君はこの山から栃木県境の枯木山（一七八五m）まで刈払をしたという。私は不賛成である。何処の山も道ばかり造り度がつて困る。せめて此処位は薙ぎの山を残しておいて貰いたい。

先刻見つけておいたナメコを土産に下る。宿の二百米手前で雨が降り出し、翌日中山峠を越えて帰った。

『ヒマラヤ登山年表』

—インド隊—
松田雄一

松田雄一

一九六一年迄の年表については会報二一七号及び二二三号にのべたとほりであるが、その後の記録についてH M Iジャーナルの資料により左記の通り追補致します。

●一九六二年四月二十六日、西シツキ

隊長は Maj. K.S. Rana, 登頂隊員は Rana 隊長の甥で Capt. H.P.S. Ahluwalia, Nawang Gombu, ナンブの Kalden, Dorje 等。

●一九六二年五月十二日、H.M.I Advance Course のメンバーによりシ

ツキムの Frey Peak (5,832 m) に登頂。

一九六二年六月、Harnam Singh Pa Norbu とナリ Institute のレディースにより、バンジャブ・ヒラヤの Deo Tibba (6,001 m) に登頂。

●一九六二年九月十九〜二十日、ラダクの Kang-Lacha (6,255 m) に登頂した隊長は H.S. Rawat 登頂者は Lakpa Tenzing, P. Wangdon Jamsang, D.S. Sisodia, Nima Dorje.

●一九六二年十月二十六日、ガルワル
の Nilgiri Pabhat (6,481 m) 登頂
隊長は Amulya Sen、登頂者は
Bhanu Banerjee, Nitai Ray
Aiceba Topgay, Phurba Chindur
Ang Dawa, Ang Pemba.

●一九六三年六月一日、クマオンの
Tharkot (6,099 m) 隊長は K. P. P.
Sharma 登頂者は K. P. Sharma
B.S. Ambasta, K.S. Thapa, Sh
erpas Lakpa and Hisse
●一九六三年六月六七日、ガルワル

6 Hathi Parbat (6,728 m) 藏
 12 Sonam Gyatso 宗喀巴 H.C.
 Rawat, Thondup Tshering,
 Lakpa Tenzing, D.S. Sisodia
 Dawa Norbu, Sonam Wangyal
 Lt. Kaushal.

●一九六三年六月十六日 ガルワルの
Sri Kailash (6,939m) 隊長は
Dhruva Kumar Pandya, 十人
隊員と六人のシェルパが登頂。

Matiri Peak (6,720 m) 隊長は
Dhruva Kumar Pandya, 登頂者は
† Gira Shah, Kokila Mehta, Na
ndini Patel (婦人隊による登頂)。
一九六四年六月二十日、ガルワルの

Nande Devi (7,817 m) 隊長
Captain Kumar, 登頂者は

晩年
餐會
次
の
記

山崎安治

一九六五年年度年次晩餐会は十二月三
日午後六時半から有楽町三井ビル八階
ホールで開かれた。年次晩餐会の出席
者は年々増加し、今年はついに約二百
名という記録破りの数になり、この数
年来的に當てていた茗茶会館では収
容しきれなくなったため会場を移した
のだが、ゆったりしていて晩餐会の雰
囲気を盛り上げるのには恰好なところ
であった。

深田理事の司会により、七十三といふこの日一番古い唯一の二桁の会員番号を持つ鳥山名誉会員の音頭で乾杯、松方会長の挨拶から晩餐会が始まった。

今年は十月に創立六十周年記念をやったので、晩餐会は中止しようとの話もあったが、山岳や山日記と同じように会員の楽しみにしているものなので、年一回必ずやることにしたと説明があり、また例年海外に出かけた隊を招待してメイン・テーブルにすえ、その報告をしてもらうのが慣例になっていたが、今年海外に出た隊は実に五十四隊にも及んだので今年はそれを中止したこと、JACの現況、山岳協会との関わりなど報告ののちいまのルームは煉

く、安心して本なども置けないのもっと広い家がほしいと会長は呼びかけた。

次いで加藤泰安、村井米子、今井雄二夫妻がそれぞれマイクの前に立った。会務に精勤のため銀座辺のバーのホステスにうらまれているという加藤理事は、鳥山名誉会長が着用していた銀鎖でふちどりの永年会員章に感激し、これを買えるのは入会後三十五年説となえたが、そうすると泰安が入会というので反対され五十年となった。

といきさつを説明。村井評議員は立山の今昔から自然保護を、今井さん御夫妻は合わせて百二十八才、二人で山に行き、いま考えてよかったと思うのことは、夫妻の倦怠期のなかったことだと会場を温い笑にくるんだ。

会場の檜ヶ岳展に因み、積雪期の檜ヶ岳初登山の話を求められた植名蒼会員は、今井御夫妻の話から山登りの話には一向に理解がなく、山に行く前に家庭的に悪戦苦斗するとユーモラスに語り、自分は元来フェミニストなので御婦人と山に行くところと面倒を見なければならず、神経をつかうのでもないで楽しい。もう余生も長くないので御婦人とは山登りしたくないと脱線し、会場から笑いが爆発した。

松方会長は再び指命されて大正十一年夏の松尾尾根の登攀を語り、そして喜作を案内にしたのかおぼえていないが、死んだ板倉（勝宣）と一緒に歩いていたのでつれていったのだらう。地図など非常によく研究して行ったが、喜作は北嶺の谷といひ峰といひ非常にくわしく、彼はこのあたりを自分庭のように歩いていたらしく、日本の山などたいていのところは彼らに歩きつくされていることを知って大いに啓発され、よい経験になった。当時のいきさつを語った。

月の小槍を喰ひつけて、殺生小屋に玉ネギを喰へに行き、近藤茂吉氏の輸入した二十メートルのザイルと六本歯のアイゼンをはいて登った思ひ出を披露した。信濃支部の小里頼忠氏は最近の槍ヶ岳について述べ、高橋達、浜野吉生、宮原魏、松田柳子の諸氏はゴジュンバカン、ロッチェシャル、グリーンランド、アンデスについてそれぞれ一言報告、神原達氏は足かけ六年間のカトマンズでの滞在の感想を述べ、

★Nawang Gombu, Dawa Norbu.

一九六四年十月二九〜三〇日、ナム・コイラヤのRathong (6,678 m)、隊長はCol B.S. Jaswal 校尉、ニヘンストの隊員選抜山行、登頂者は選年のニヘンスト登頂者 Capt. Ahluwalia, Nawang Gombu, Sonam Gyatsho, A.S. Chetra, Sonam Wangyal, H.C.S. Rawat 等を含む十一名。

一九六四年六月四〜六日、マヤン・マレーヤのPanch Chuli III (6,312 m)、IV (6,334 m)、V (6,437 m) に登頂。隊長は Flt. Lt. A.K. Chowdhury 登頂者は Amulya Sen, Capt. A.S. Cheema, Sheeraj Singh, Sherpa Nima Dorje and Sherpa Tashi.

一九六四年十月十一〜十二日、ガルホルのMirighuni (6,855 m) 婦人隊登頂。隊長は英国の Mrs. Joyce Dunsheath, 登頂者は Miss Rani Bhagwan Das, Miss Usha Sarpas Kar, Durga Gurung, Tashi.

一九六四年十月十三日、カンダラの Mukerbeh (6,069 m)、隊長は Harnam Singh, 登頂者はマナリの Himalaya Institute のメンバー。

一九六四年十月十八日、ガルホルの Devlekhne (6,086 m)、隊長は Sunit Bose, 登頂者は Blay Bose, Samar Banerjee, Sunil Chowdhuri, Sherpa Aieha, Toppay.

一九六二〜六四年のインド隊による登山活動の中、登頂に成功した隊の記録は大体以上の通りであるが、中印国境紛争以後は、登山活動もインド領内の国境から離れた山に対してのみ行われており、記録的には特筆すべきものはないが、活動しているメンバーの名前を見ても一九六五年のニヘンスト隊が、どの様な課程で訓練されてきたかとしてインド隊の成功が僥倖によるものではないことを知ることができる。



昭和40年年次晩餐会 松方会長挨拶 一羽田栄治氏写一

日印合同婦人ヒマラヤ遠征隊派遣中止

日印合同婦人ヒマラヤ遠征隊委員会および事務局では去る十一月八日会議を開き、インド・パキスタン紛争に伴う今後の方針を検討した。その結果両国間の紛争は一応終結しているが、現状ではインド国内に平和が取り戻されたとはいえられず、また、インド関係者の意見でも登山隊の入山許可の入手については悲観的であること等を考え併せ、来春の遠征隊派遣は到底不可能であり、その後の情勢についても予測できない状態にあるので、この際遠征隊派遣計画は中止することとした。また、これと同時に、委員会および事務局も解散した。

尚、東京支部婦人部では引き続きインドとの連絡を密にし、再び機会があれば合同遠征隊派遣を実現したい考えである。

会報紙上をおかりし、これまで御協力、御助言いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

昭和四十年十二月一日
遠征隊委員会委員長
三田 幸夫

◆登山界の横の連絡を強調した。

最後に藤島敏男新名譽会員は、深田久弥などとも知りあいにあったのが運のつき、村井さんがいくらか声を高くして自然保護を説いてのちつとも羨らない鹿のなき声のきこえる静かな山登りから、僕は歯きりなどしないし、今日集まっている人のうち何人が毎月山に行っているのだろうか、年で山に行かないなどというのはエサが悪いから、私はまだまだ山に行くことと結んだ。

なお松田理事から、こういう楽しい集まりは、年二回あったらよいのではないかと提案があり、来年から四月の会員総会も、ディナー形式で開くことに全員拍手で決めたことを書きそえておきたい。

(編者注・当日開かれた「一本展」については次号に掲載します)

(出席者・来場順) 高木菊三郎、交野武一、高田俊雄、小里頼忠、高山忠四朗、浅輪幸久、中川須磨子、滝口星子、淡田叔子、工藤英司、日高信六郎、水野祥太郎、佐藤久一朗、神谷泰、渡辺公平、野口末延、曾原喜久蔵、藤島敏男、福井正吉、中田勇吉、深田久弥、松田雄一、松田柳子、永原輝雄、藤井運平、茶谷東海、後藤恵治、松本熊次郎、小原勝郎、村井米子、折井健一、高橋昭、諸岡一、原田幹市、飯野亨、松方三郎、山崎安治、丹部節雄、栗橋勝雄、岡徳徳之助、坂下心一、山口健児、上村伯太郎、大橋晋、今井友之助、岡本竜行、西丸震哉、日下田実、神原忠夫、鈴木昭、小松山隆夫、早川義郎、川崎隆章、山本久子、尹官炳、三辺夏雄、岡村治信、中野満、横山厚夫、菊地文雄、小山勝司、浜野吉生、松沢憲夫、平沢亀一郎、亀井公、奥川雪江、黛治也、川口善三、

ローガン山脈の最高峰

Bill Buckingham, Lew Sirdam は一九六五年夏、ローガン山脈の南部を横断、九峰の内八峰は初登頂。彼等を Mt. Nirvana と命名した山は、ローガン山脈の最高峰であるばかりでなく、北西地方での最高峰と考えられる。この地域はカナダの最高点たるローガン峰の東約六四〇キロに当る。(CAC News, No. 86)

青木昇、古沢肇、山下潔、秋元千江野、島山徳成、芳野菊子、川喜田杜太郎、和田一男、鶴岡元之助、渡辺徳進、藤波男、山田、中村謙、沼倉寛二郎、牧野衛、吉沢一郎、小沢武雄、三田紀夫、柴田晴彦、今井雄二、河合亨、近藤茂吉代、美坂哲男、三田幸夫、植有恒、加藤泰安、山下一夫、松井芳隆、田村耕、隈部恵子、瀧名貞利、今井善美子、藤原玄、小味秀純、松永敏郎、今西寿雄、渡辺力、三浦義明、広羽清、須田紀子、安川茂雄、今井嘉道、吉武正子、見学玄、入沢文明、水瀬昭典、杉山孝、住吉仙也、池場孝昌、石原憲治、小林敏司、都筑竜、朝井一男、小泉満、神原達、萩野和夫、秋元一浩、柴田哲也、川崎精雄、望月達夫、田辺主計、小林義正、中河与一、国見利夫、佐藤テル、篠塚貞雄、竹田寛次、辰沼弘吉、村上勝太郎、池田光二、鈴木英一、名須川浩、外山義夫、羽田栄治、楠林靖之、坂井貞義、内海皓也、川森左智子、高橋進、宇田川久太郎、坂倉登喜子、大塚博美、星野重、村木潤次郎、後藤幹次、吉阪隆正、井上博、山口節子、田中弘美、森山勇、井上公利、細井隆司、桜井信雄、山本良三、中原繁之助、岩間利美、長尾徳夫、徳久球雄、芳野超夫、川崎廣、細川沙多子、網蔵志朗、宮原誠、小倉茂雄、小倉重子、斎藤健治、島田翼

MT. WADDINGTON

(4041 m)

British Columbia, Canada

一九六五年
八月の試み

角口想蔵

現地では Mt. Waddington が Mystery "神祕の山" と呼んでいる。登山史としてはアメリカ隊の一九六〇年七月の初登攀のようにも思われる。第二回はカナダ隊が一九六二年七月に行ない、私達の行動開始以前に、カナダのビッグ隊がやはり夏期に雪崩で全滅の悲劇があって、私達は第四回目のアタックである。

(この項、あとの編者注参照)
登山ブームの日本でもまだこの未開拓地、British Columbia の海岸山脈に、スポーツとしての登山を行なっているものは余りない。

巨大なティードマン氷河を中心にして、ウォーディントン氷河やティロット、フランクリン等の氷河が、延々と流れている広大な荒涼たる地域の奥深くに、ひと際高く聳えている鋭い岩塔が即ち私達の挑んだウォーディントン山である。

私達はこれに期待をかけ、登頂を挑みはしたが、結果は、空しく不成功、と言ったおきまりの文句に終ってしまつた。われわれは満たされない空虚な心を抱きながら、熊の大飲み場である有名な「ゴースト・レーク」(幽霊湖)に引上げて来た。いうまでもなくこの湖畔は登山基地として、重要な位置におかれてゐる。

- A) Mt. Waddington
B) Teller Gl.
C) Cairn on the Nabob Pass
D) Bravo Gl.
E) Tiedemann Gl.
(写真を見てかきました。I・Y)↓

幽霊湖の思い出

何と怪奇な言葉であろう。幽霊の湖。ここゴースト・レークにも、最早初秋の香が漂い始め、灌木の葉の色づきにも変化の来ているのに気が付くと、急に寂しさがひしひしと身に沁みて、孤



島に取り残された様に望郷の旅愁が、つねなく私達を襲ひだした。



湖面に霧が立ち込める静寂な朝だ。聞き覚えのあるセスナリ水上機が爆音を響かせて、私達の頭上に飛んで来た。出来ればあの飛行機に乗り、この孤島の様な湖畔から一日も早く離れたい気持ちで、皆手を振り合図をした。間もなく二台のセスナリは、幽霊湖、目指して着水し始めた。嬉しい接岸の二機からは早くもパイロットが降りて来た。彼等は私達をここへ輸送してくれた顔なじみであった。私達を迎えに來たのは予定日から早過ぎる。間違えて来たのであろうか。暫らくすると外人が無言の顔で降りて来た。彼等も又、何かを考えながら着水したのでもあろうか。

素晴らしいあの空からの大観、海岸山脈の、而も真白な氷雪の延々として遠く遙かに広げられた荒涼たるあの風貌は、どんな旅行者にも忘れようとして忘れられない強い印象を与えるのだ。その陶酔した眼差し、この幽玄境を訪れたその心境は、誰しも味あう同じ心境であろう。

彼等は紛れもなく登山者であった。後ほどの会話でわかったことだが、米、加の合同登山隊だったのである。勿論彼等もウォーディントンを目指してやって来たのだ。彼等の目標は主峰の北尾根であった。私達同様彼等も、遙るば

るこの酷しい世界に飛び込んで来て、劇しい登攀に向うのである。

た。ご諒承下さい。(I・Y)
(編者注)
ウォーディントンの初登頂その他を略記する次の通りである。
1936年(西面) Fritz H. Wiesner, W. P. House—USA—
(これ以前に1933年の Roger & Ferris Neave 兄弟、Campbell Second—アレンゴ、ホルから北東面を攀じ、250 m まで迫り悪天で退却一の試みを含め、16回の攻撃が行なわれている。)
1942年、Fred Becky, Helmy Becky 兄弟—USA、第2登—
1950年(南東面) Oscar Cook, Ray de Sausure, William Long, Richard C. Houston—(北面) Phil Better, Allen Steck, William Dunmire, James Wilson (前二者が登頂、後二者は頂下の山腹にて待つ)—USA、第3登—
1955年、Adolf Bitterlich 他6人、20 m 低い西峰に登頂。
1958年、Adolf Bitterlich, Arno Meier, John Owen, Christian Schiel—第4登、Canada 隊の第1登—
1963年、Mazamas 山岳会の Robert Martin 等が夏季の三週間の間に主峰及び Mt. Jeffery, Pendulum Pinnacle の新登頂を行なった。
・参考資料・CAJ(1942, 1943, 1959), AAJ(1948, 1951, 1965) その他。



ゴースト湖でのスナッフ

図書紹介

立山史談

佐伯立光 著



この本は信仰のた
めの山であったなが
い歴史を説明してい
るものであるが、わたくしたちの山登
りがはじまってからも、この山は親し
い冬のメッカとしておなじみの山とな
っている。読むだけでも楽しいもの
である。

内容は縁起、信仰、本寺、末寺、仲
宮衆徒、社人、などの信仰についての
記事が多いが、その他に、黒部奥山廻
り、文化財なども入っている。

文中でメモして見たものを一つ。
「戸峠にスキーが入ったのは、大正
六年であるが、立山がスキーに適地と
知られるや、多くのスキー客を迎えて
いる。しかし反面、大正十二年板倉
氏、昭和五年土屋氏など、記録に残る
ような遭難も起っているのである。

大正の年になると、中語という名称
もガイドと改称され、現在と違ってこ
の頃は、握力山の知識・ルート、高山
植物・テントの張り方、飯のたき方、
スキー技術などの講習、試験を行なっ
ており、A・B・Cの三クラスよりなっ
て、ガイドはかならず警察署長の証明
書が必要とする厳格なものであった。

また、現在の寺カ（強力）は、明
治の頃には岩峠村・宮路・下田・中
野新村・横井村・座主坊などの人々が
農業のあい間をみて、室堂まで荷物を
運んでいた。明治の頃の案内料は、三
日間（荷物十六キロ以内）で一日二
十銭、荷物や日が増すごとに、一日四
十銭が加算されている。大正に入ると
戸峠にガイドの組合が再設置され、ま
た千垣駅にも取扱所を設けて、案内料

も一日三円で、頂上に登り下山すれば
一日につき五十銭が加算され、もし長
野県大町辺りで解雇された場合は、二
日分と帰りの汽車賃を支払ってもらい
山中の食費などはすべて登山客の負担
となっている。

とにかくこの本は社会経済史的なも
のというより郷土史的なものであるが
登山史の資料として忘れられぬもの
のひとつとなるであろう。

B5版、本文一〇八ページ、昭和四
十年七月一日、立山町佐伯立光発行、
限定贈写版三〇〇部、非売品。

久住山志植物編

工藤元平 著

久住山は九州の代表的な植物分布を
示し、植物の宝庫である。コケモモ、
ミヤマキリシマの大群落などには有名で
早くから久住山群の植物目録の完成が
待たれていたが、このほど、くじょうと
共に生きてきた、本会会員工藤元平氏
（会員番号一〇四七番）の手で大分市
の藤井書店から発行された。

「長い間、郷土の山にたいし、雄大
なる大自然のふところに抱かれたつ
日々その恩恵と啓示を受け来った
私にとって、山は実に私の生命であ
り、そして私の墓場である」と久住山
志の冒頭に述べているように、工藤氏
はその生涯を久住山に捧げてきた。

氏はくじょうの宣伝、紹介につとめる
かたわら、寸秒を惜んで山にしたしみ
久住山にも千回記念の登山をした程で
その間、くじょうの山の一本一草に至る
まであますところなく調べあげ、集録
された植物も数知れず、この書はすく
れた郷土の植物誌である。

本書は総論・久住山植物文化史・雑
録・植物目録と四部に分れている。と
くに牧野富太郎博士、ロシアのマキシ
モウィッチなど、これまでくじょうに登

山し、植物を研究した学者、登山家な
どの植物文化史が特徴で、資料も豊
富、興味深くかかれていて、写真もカ
ラで天覧植物となったコケモモの色
彩などすばらしい。本書は植物の研究
書として、また植物によるくじょうガイ
ドブックとしても利用価値がある。

（昭和41・10発行・B6版二〇五頁、カ
ラー四頁、写真四頁、発売元 大分市
中央町藤井書店、五〇〇円）

“On the Heights”, Walter Bonatti,

訳者—Lovett F. Edwards.
Rupert Hart-Davis, London,
1964. 原書は “Le mie mon-
tagne”, Nicola Zanichelli,
Bologna, 1961, (初版)

ワルター・ボナッティの Le mie
montagne (私の山) が英訳された。
彼とはブルのリマはモレーレスの家
で握手をした（一九六一年）ことがあ
るので、特に関心が深い。

この本にはワンダーフォーゲルやハ
イキングのような山登り一つも書い
てない。これであるがボナッティとい
う男は、いつも可能性のギリギリのと
ころを、ハート・イン・マウス（この
言葉がよく出てくるが、これはヒヤヒ
ヤとかおっかなびっくりという意味ら
しい）で攀じたり、トラバースばかり
している人間らしい。

こういう本は何処を読んでも同じだ
が、筆の間にチョイチョイ触れている
彼の登山観というより、登攀観なるも
のにはなかなか面白いがある。本全
体の内容の紹介はこの次に譲り、彼の
エキスパンション・ポルトについての
考えをみてみよう。

◇ 思うに、エベレストやK2での勝利

というような地理学上重要な特定物の
調査、征服などは別として、登攀とい
うのは、何にもまして、自然の征服
とか、自分に勝つという意識による最
大の切迫感を経験するために、不思議
な山の世界で生きることを正当化する
ものでなければならぬ。従ってこの
ためには、一登攀家としての自らの良
識に従ってその目標に達しようとする
ため、登攀手段というものが条件に
なるわけである。

ここ数年間、登攀家の間に興味の中心
となってきた手段は、勿論、総ての
登攀家に同じ意味をもたせるものとし
るには、余りにも主観的な事柄ではあ
るが、若し、肉体的及び精神的な行為
の間の必須のバランスを危くするもの
でないかというのであれば、総ての登
攀手段は正当なものとなるだろうし、
又、妥当なものともなり得るのである。

自分のことを言えば、最初に登攀を
はじめた以来自分はずっと、あるルー
ルを守ってきた。一方において自分の
野望を充分満足させながら、同時にアル
ピニストとしての自分の良識の基準
をそのルールの上にのせて来たことを
自分は認める。

もっと具体的に言えば、私は登攀手
段としてビトンを使うことさえルール
違反だと思っているし、又最近工夫され
て来た人工的、機械的な手段、即ちエ
キスパンション・ポルトの如きものの
使用は、最も排撃せらるべきものと思
えているのである。

私は單ろ、本質的な難しさをなくさ
ず、又、それを克服したと自ら知る大
きな喜びを消すことなく、どんな壁で
も登ることの出来るあの登山の形式、
方法を採りたいと思う。実際私は手段
において、意図において、コミ
チ、ディマイ兄弟等がチマ・グララン
デ・ディ・ラヴレドの北壁を、ヘック
マイヤーとその仲間がアイガーの北壁

を、カシンがグラランド・ジョラスの北
壁を完登した時のような、古典的な方
式を選びたいと思っている。
その実例としてチマ・グラランデ・デ
イ・ラヴレドの北壁を考えてみよう。
それは前に述べたことだが、その山
容は素晴らしい、全く大きな魅惑であ
る。然しビトンなしでは登れない。と
いっても経験の深い登攀家の技術と勇
気さえあれば、極くありふれたビトン
で登れるのである。この場合エキスパ
ンション・ポルトとかその他の道具を
使うとなると、条件は非常に異なった
ものとなる。エキスパンション・ポ
ルトは本質的には岩の中へセメントで固
め込まれたスパイクのようなものであ
るからである。これを使うとなると、
予測出来ないことの不安感とか、登攀
への挑戦といったような感情は全く消
え失せ、不可能、という言葉が全く
無意味なものとなってしまう。

ある「最早、通れなくなった時に、
優れた腕力があれば通れるようになる
（無理が通れば道理引込む）」という
諺の通りになると、肉体的なものの方
が優先してしまつて、それと精神的な
努力との間のバランスが崩れてしま
う。これでは登攀の真諦というものは
抹殺されてしまい、その登攀行為の理
由さえも全く行方不明となり唯、単
なる苛酷な残忍な行為だけが残るという
結果となるのである。

私は更にこうもいいたいのである。
このような無益な結束を解らすのは、
そのような道具を使うが故にではなく、
登攀中、使用の意図が少しもなくとも
リニックサックの底に忍ばせておき、
必要ならいつでも使えるということを知
っているだけでも、その登攀の精神的
な価値は破壊されてしまうのである
と。」

（未完・吉沢一郎）



中村清太郎氏画

新着海外図書雑誌

Journals Arrived in

October, 1965

1. Jahrbuch des Deutschen Alpenvereins 1964, (Alpenvereinschrift Band 89).
2. Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins, 17. Jahrgang. Heft 1 Januar 1965.
3. Union Internationale des Associations D'Alpinisme Bulletin trimestriel No. 17, Aout 1965.
4. 台湾山岳会報第14卷第五期 (中華民國54年9-10月号)
5. Appalachia Bulletin Vol. XXXI N.S. No. 10, October 1965.

Journals Arrived in

November, 1965

1. Österreichische Alpenzeitung Folge 1342, Juli/August, 1965.
2. Himalayan Mountaineering Journal Vol. 1, No. 1, July 1965.
3. Alpinismus, Oktober, 1965.
4. Rivista Mensile Vol. LXXIV-1965, No. 8-Agosto, 1965.

「図書・雑誌」

- (1) Jean Franco et Lionel Terray: Bataille pour le Jannu. Gallimard, 20F.

此の程本会宛に出版元の Editions

Gallimard 社より今年刊行されたジャーナルの報告書が届いた。内容の紹介は会報二四五号一頁参照。

(2) INDIAN MOUNT EVEREST EXPEDITION 1965.

インドのヘンレスト隊の公式登頂速報である。インド登山財団を代表して国防省の陸軍情報部が発行したもので全アト44頁のリポート、これをよむと戦後インド国内においていかにヒマラヤイズムが台頭し、ヘンレスト登頂にまで発展したかが解る様に編集されている。登頂記録が簡単にすぎることが物足りないが、同時期にローツェの山塊をへだてた反対側で行動していた早大ローツェ・シヤール隊との隊の動き、天候の相違等を比較しながらよむとおもしろい。

尚資料は若干の記録写真と共に松方会長あてに在印の知人から送られてきたものであるが、会では写真と共にヘンレストの資料として一括してアルバムにファイル保存したいと考えている。尚この資料の詳細については吉沢一郎氏が「山と溪谷」三三〇号(昭和40・9月号)36~43頁に詳細に報告しているのを参照された。

(3) William E. Siri: Final Report. Physiological Studies on Mt. Everest Climbers, June 1965. アメリカ一九六三年ヘンレスト登山隊の科学班を率い、副隊長として参加したカリフォルニア大学ドナー研究所の教授であるウィリアム・エ・シリ博士が、まとめたヘンレストでの高処人体生理解の Final Report である。特に同氏の好意で本会に送られてきたもので六五頁に及ぶ大論文である。内容は専門的で非常に難かしいが、会員の三方氏が展沼氏と協同で翻訳されたのを、この方面に関心の者の御一読をおすすめします。原文、邦訳ともルールの雑誌架にあります。(松田)

山岳雑誌

The Himalayan Mountaineering Journal Vol. 1, No. 1, July 1965

インド、ダージリンにある Himalayan Mountaineering Institute の Principal によって編集された公式のジャーナルである。

この登山学校については会報二〇一号及び二二七号等でその設立の経緯、活動状況を報告したが、今迄は一九六五年一月から年二回発行されていた News letter が唯一の報告書であったが、この度各方面からの要望により六月と十二月の二回「ジャーナル・ジャーナル」と同じ体裁のジャーナル(二〇〇頁)が刊行されることになった。Editorial によれば、その内容はヒマラヤ遠征隊の報告の他にヒマラヤに関する研究や登山活動のものを由である。

第一巻第一号の内容を紹介すると、インド隊による登山年表(Hill People の肺活量と題する研究報告、多数の文献をあげて考察した P.K. Gangopadhyaya 博士によるコトラー地方の Some Geological Observations. ダーリン Lloyd 植物園 G. G. Sen 氏によるシッキム・コトラーの植物、インド婦人登山隊による Mt. Guntur 登頂記録、ダージリンヒマラヤ動物園長 D.K. Day 氏による Why preserve wild-life? という論説、H.M.I. の活動報告「登山界ニュース」そして巻末に南極のスコーットの最後の日記を三十一頁に亘り載せている。別に解説はついていないがおそらく Editor である Jaswal 校長が共鳴している文章で H.M.I. の生徒によんでもらいたいために掲載したのと思われる。

尚 H.M.I. の報告には各コースの受講者の名簿をのせているがこれによる

と Basic Course は第四十五回(毎回約三十名) Advance Course は二十四回(毎回五〜八名)を数えている。そして最後は十九才以下の少年により行なわれた第二回の Adventure Course の合格者五十名の氏名が掲載されており、H.M.I. の活発な活動状況がよくわかる。参考迄に記すと Basic Course は年五回、Advance Course は年四回(内女性のみによるもの一回を含む) Adventure Course は年二回開催されている。

尚このジャーナルの購読料は一部二ルビー、終身購読料は五〇ルビーである。(松田)

Union Internationale des Associations D'Alpinisme Bulletin trimestriel No. 17, Aout 1965

国際山岳協会連合の会報一九六五年秋季号が到着した。この連合はジュネーブに本拠をおき、主としてヨーロッパのその国を代表する山岳会又は山岳連盟の加盟により成立している。会長はスイス山岳会のウイス・デナナン。この号は本年六月二十六日、オランダのユトレヒトで開催された一九六五年度の年次総会(Assemblée annuelle de l'U.I.A.A.-Utrecht 1965)報告が中心となっている。この総会には一七ヶ国一九団体の代表が出席している。参考迄に国名を上げてみると、スイス、ドイツ、オーストリア、英国、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー等の登山の盛んな国その他にブルガリア、スペイン、ギリシャ、リベチン、シュタイン、ルクセンブルグ、モロッコ、ポランド、チェコスロバキア、ユーゴスラビア等が顔をのぞかす。この総会で新たに、ノルウェー、ベル、アルゼンチンの加盟が承認されている。

一九六六年度の総会は同年九月にイ

タリーの Courmayeur に於てイタリア山岳会の招待により開催される予定である。(松田)

Österreichische Alpenzeitung Folge 1342, Juli/August, 1965

本号はマッターホルンの登頂百年を記念し、マッターホルン特集号となっている。

巻頭は Carl Rind による 100 Jahre Matterhorn, 続いて D.F.O. Danger, Die Briten und das Matterhorn, と題して、英国とマッターホルンの登山史の関係を Alfonso Bernardi による Der Italienische Alpinismus und das Matterhorn イタリーのブルギースト達がいかにマッターホルンに挑戦したか、西壁、北壁の登攀に至る迄詳細にのべている。この Alfred Horschowsky が Matterhorn-Nordwand を Franz Schmid が一九三三年の マッタンゼルス・オリンピックに際し、ロス・ホーシンの北壁初登攀者に金メダルをたそうとした経緯についてふれている。尚今号の世界の山はガングバル初登攀のドイツ隊をとりあげている。(松田)

ロンドン冬期初登攀

一九六五・三・七。Fred Becky, Leif Patterson, Alex Bernits, Tom Stewart の四人は、快晴、寒冷の天候の中を、六日かかってロンドンの冬期初登攀に成功した。

キリマンジャロにバランシ

ート

Jack Weicker は一九六五・二・六バランシートで峰に登山。三年前にも仏人が同じことをやったらしい。

酸素欠乏症特效薬

米陸軍ではハイボクシアの特效薬を試験中。それは腎臓に作用して身体中の酸性含有量を増加する。完成すれば高度順化を早めよう。(AAC-News, No. 86)



会務報告

常務理事会

△日時 十一月二十九日(月)七時半
△場所 本会ルーム

△出席者 加藤、辰沼、松田、飯野
△議事

(1)「山岳」六〇年号定価値上げの件
山岳編集者 望月評議員より要望のあった値上げの件は要望通り、五〇〇円とすることを承認。

(2)「山岳」商標登録の件
登録することとし、事務手続きを東京支部関口委員に一任することを決める。

(3)入会承認者で入会手続き完了のもの処置について
理事会にて入会を承認されていながら入会の手続きをとっていない者が二十数名に達し、事務処理上困難を来しているが、これら諸氏については年内に手続き完了のものは入会の意志がないものと認め、入会の承認を定款第七条により取消すことにする。その旨連絡し早急に手続をとられる様をお願いすることにする。

(4)会報バックナンバー頒布の件
会報バックナンバー頒布の件を会報に告示し、一部二十円にて希望者に頒布することにする。

(5)本会所有の絵等の保存方法について
ルームの倉庫は、湿気も多く必ずしも適当な場所(次頁上段へ)■

支部情報

東京支部

十二月一日(水)役員会

出席者 石原、沼倉、折井、小味、鈴木和、広谷、山口、村井田、関口、安彦、倉知、鈴木、芳野、松永

1 報告事項
(イ)東京大学キャンパス・遠征隊報告の件
十一月十七日の三水会は参加者27名で貴重なフィルムを鑑賞した。

(ロ)婦人部・インド隊合同遠征計画の件
インド・バキスタンの国情に依りまたインド隊の連絡がない為、明年三月出発が不可能となったので計画は無期延期とする。なお、ヒマラヤ委員会事務局は解散する。

2 議事
(イ)庶務係の負担軽減について
現在、支部庶務係の事務雑件の負担が多く、係が過労に陥っている。各係は分担を明確にして庶務係の負担を軽減すること。

(ロ)バリエイ名称の変更の件
十二月十五日(水)開催予定のクリスマスパーティーの名称は忘年会に変更する。集金係は会員の有無を確認する。

(ハ)スキースクール役員会の件
四十一年一月開催のスキースクール役員は委員長に一任する。

(ニ)懇親スキー行計画の件
四十一年二月五日六日、奥日光湯元スキー場に於いて開催する。募集人員四十名、会費三四〇〇円。係：関口・村井田・鈴木

以上

★支部費を支部へお払込み下さい★

関西支部 四〇〇円

四一年一月七日より、何故登山学校を始めたか(川崎隆章)、シルク・ロード踏査出発に(深田久弥)から始まり、三月二十四日終講になるまでに凡そ次の様な講義と実習が行われた。私の見たところ登録生徒数約三〇〇人、通常聴講者平均八〇人位である。然し生徒は皆熱心で真面目に勉強しているのは頼む。

冬山の装備、衣料・標識
「日本登山学校冬季課程」
一 於万世橋交通博物館
一 気象概論と天気図・医療
問題一 雪山の生活技術・雪崩・雪崩・世界の登山界
真術・雪崩・世界の登山界
一 岳人伝・トランシーバー研究発表その他。

表技は八ヶ岳、雲竜峽、土樽、仙丈岳に出かけて研究を実施。(吉沢・記)

今年度の年次総会の席上、岡田、徳之助、中原繁之助氏等、当日出席された永年会員の胸には、栄誉ある永年会員章が輝いていた。このパッチは、六十周年の記念祝賀パーティーの席上、在籍五十年以上の永年会員二十七名に贈られたもので、スミス山岳会の永年会員パッチの様に会員の周囲に銀の枠がついているものである。今後は毎年その年を以て在籍五十年に達した会員に対し、年次晩餐会の席上贈られることになっており

会員章覚え書

松田雄一

今年度の年次総会の席上、岡田、徳之助、中原繁之助氏等、当日出席された永年会員の胸には、栄誉ある永年会員章が輝いていた。このパッチは、六十周年の記念祝賀パーティーの席上、在籍五十年以上の永年会員二十七名に贈られたもので、スミス山岳会の永年会員パッチの様に会員の周囲に銀の枠がついているものである。今後は毎年その年を以て在籍五十年に達した会員に対し、年次晩餐会の席上贈られることになっており

一九六六年……六名
一九六七年……六名
一九六八年……五名
一九六九年……二名
一九七〇年……二名

の様に予定されている。

ところで本会のパッチで、現在通用しているパッチは、正章、略章、永年会員章の三種になった訳であるが、会員章が制定された経緯について知っている会員も少ないので、当時の模様を古い「山岳」から紹介してみよう。

本会が創立されたのは一九〇五年十月十四日であり、当時は「山岳会」と称していたが、一九〇九年の六月に「日本山岳会」という名称に変更し、六月一日に会員章を制定した。これは現在本会で略章として使用しているものと同一形状のもので、会員武井真澄氏の意匠によるものである。「山岳四年二号によると、「山字を山体そのものに象りたる三角形に描き出し、三体に組合せ、その頂点に集中せる空位には、山岳の神秘と壯麗とを包容、且つ示現する雪を六花を刻みて配することにより」とあります。材質は純銀台の七宝で、山字形は白、空位に色彩を配し、その色種により、会員の種別を示し、名譽会員……赤、雪輪は金

特別会員……赤
正会員……オリーブ色
役員……紫色

その後、この会員章は形状が登山にむいておらず、破損し易く紛失し易いこと(特に和服に着用した時にこの不便があった)を理由に、形状を変更することを懇請するものもあり、一九二〇年(大正九年)二月に断然変更することを決意した模様である。このことは「山岳」十四年一号に「会員章の変更」と題して次の様に記されている。即ち「意匠は旧会員章は稍々華美に流るるの非難ありしと、年を経て七宝刺工を用いず、Japanese Alpine Clubの頭文字を組合はせ、且つ会員は平等なるを以て色彩を以て区別することなく、裏面に会員番号を刻み、会員原簿に登録する」とあります。そして旧会員章を希望者に頒布したのに対し、今回のものは旧会員章と引換えに貸与する方針をとり、大正九年四月一日より実施した模様である。

尚「山岳」十四年二号には新会員章決定の記事が次の様に記されている。

「本会幹事及び評議員により提出された種々の案をもちに描き出た多数の図案中より、中村清太郎、武田久吉、梅沢親光の三幹事より成る特別委員の選定したるものにして挿図にみるが如く、外形を楕円形となし、その表面には、JACの三文字を組合はせたるモノグラムを、又裏面には日本山岳会の五文字を打出し、概して簡潔を旨としたる簡単明瞭にして一見その何たるかを知らうると同時に構造をして困難ならしめうるの利あり」とある。

そしてこれは東京府立工芸学校に制作を依頼し、且つその工程の一部並びに製作上の監督には、会員松井幹雄氏を煩わした由である。この会員章の材質は純銅を用い、今日迄本会の正章として用いられているものである。

この会員章は戦前は貸与の方針をとり、万一紛失した場合には、無効届けを出して、新番号のパッチを再交付する方針をとってきたが、戦後休協加盟に伴い会員数が急増したため、この制度もなくなり、番号のないものを再交付する様になった。且つ本年には旧番号での復活会章制度が確立され、その上永年会員の制度などできると、入会年と会員番号が一致していないと大きな不便があり、この点から最近では再交付された番号が新らしくなった会員の旧番号への復帰も行われております。目下庶務係では、全会員のこの種の番号の整理を行っておりますが、自分の番号について疑問なり矛盾をお持ちの方は申出下さい。(以上)

■はないので、適当な保管方法を考えることにする。

(6) 経理方式変更の件……(飯野)

飯野案を検討し、理事会にかけることにする。

(7) 定款改正の件……(松田)

現行の定款に若干改正すべき点がみられるので、松田より問題点を説明し、改正すべき個所の確認を行う。これに基づき庶務担当理事が改正原案を作成することに。以上

十二月理事・評議員会

(二日・ルーム)

▽出席者 松方会長、三田副会長、理事—加藤、深田、辰沼、大塚、飯野、松田、川崎、田辺、田村、竹田、杉浦、宮下、住吉、評議員—折井、藤井、村井、石原(憲)、牧野、中田、高山、東京支部沼倉委員、(以下委任) 村木、川上理事、津田、今西(寿)、望月、石原(国) 各評議員。

▽議事

(1) 山岳協会の新組織にともなう各支部団体会員の有り方につき検討(加藤) 松方構想に基づく今回の新組織について説明があり(会報一四六号四頁参照) 各支部に対しての協力が要請された。これに対し出席の各支部長より、各支部の事情が説明された。それによると、信濃、越後、関西各支部は問題はない様であるが、東京、富山には若干問題がある様である。特に富山の中田支部長からは、富山山岳協会の設立につき、中央の山岳協会役員の協力を求める旨の要望がなされた。

これにひきつづき種々と検討が行われ、最後に松方会長よりこの問題についての見解が次の様に述べられた。

「各県体協加盟山岳団体は一月十五日迄に各県体協を通じて山岳協会に加盟されたいとの要望がなされており、

これにもとずきJAC各支部、団体会員はそれ以前に県体協加盟山岳団体に加盟する様に要望されているが、訳が解らずに入らねばならないということはないので、充分に納得してから加盟してもらいたい。いずれにせよ、本会とは少しも異なる誤であるから、そうシリアスに考えることはない。

(2) 収支決算、予算編成方法変更に関する件……(飯野) 本会の年間予算も五〇〇万円を越える様になったので、従来の経理事務処理方式では不備な点もでてきたので、次の様に処理方式を変更したい。

① 収支決算方法

○当該年度中の現金収支のみを以て処理することを原則とし、定款第四條第三十六條第三号に定める事業についてのみ、当該年度末現在の未収入、未払金額を含めて処理する。但し各支部の収支は含めない。

○従来山日記、山岳等で行われていた差額処理、又医療連絡会等ととられていた通過勘定の未計上は認めない。

○勘定項目を整理し、収入は、経常収入、事業収入、雑収入の三項目、支出は運営管理費、事業費に大別する。

○経過措置として本年度は運営財産中の現金、預金、信託、貯金の総額を前年度繰越金として計上し、又各種名義の基金をすべて取崩すことにする。

○上高地山荘勘定は、経理担当理事の管轄とし、毎年シーズン中の会計を分離する方針とする。

② 予算編成方法 毎年一月に経理、総務、庶務担当の各理事協議により素案を作成し、↓常務理事会→会長原案として確定する。二月の理事会にて予算編成の趣旨を説明し三月の理事会で予算を

確定する。

予算の項目は、大略決算と同じくし総会にて承認を得た後、常務理事会で実行予算の編成を行い、六月の理事会に於て議決する。

以上の様に飯野理事より説明がありこれに対し若干の質疑応答が行われた後、本件は原案通り承認され、昭和四十年年度の決算、四十一年度の予算から採用することになった。

次にこれに基づき昭和四十一年度の予算を推定してみると約四十万円程度の赤字が推定され、そのためには会費を二割程度アップしなければ会の財政は維持できない旨の説明があったが、会費値上げ問題は次回理事会迄留保された。

(3) 年次晩餐会の件……(深田)

十二月三日(金) 日比谷の三井ビル八階ホールで行うことにしているが、出席申込者は一九八名に達している。この一本展は、今年は槍ヶ岳に関するものを集めている。

(4) 学生部報告……(田辺)

十一月十六日、雪崩の講演会、十一月二十九日、協会問題で懇談し、十二月一日〜四日冬山計画検討会を行っている。

尚学生部の有志で明年四月〜十月の予定でアラスカ、カナダの山に登る計画があるが、この計画をJAC学生部の計画とすることを諒承した。

(5) その他報告事項

① 中日映画社の「大岩壁」は十一月十六日の試写会の後で検討したが推薦を見送ることにした。

② 本会の装備は十一月六日休協地下室の山岳協会の倉庫へ移し一時保管を依頼することにした。

③ 次回理事、評議員会は一月十三日(木)に開催。

(以上)

叙 勲

名誉会員 日高信六郎氏

勲二等旭日重光章

東京支部長 石原憲治氏

勲四等旭日小綬章

左二氏は多年に亘る御功勞により昨年十一月三日、総理府よりそれぞれ叙勲をうけられました。

本会はここに謹んで両氏の御名譽をお慶び申し上げます。

計 報

橋本三八氏（会員番号一七一三番 昭和十二年六月入会）

会誌二四五号でお知らせした通り、本会評議員橋本三八氏は十二月四日午前十時二十五分逝去されました。

葬儀は十二月六日午後一時より、淨蓮寺に於て、福岡県山岳連盟葬によりとり行われたが、本会からは生花をおくり、松方会長代理として会員月原俊二氏が弔辭を捧げた。尚御遺族より、故人生前の遺志により、福岡県対がん協会並びに福岡県山岳連盟遺難対策基金に寄付することにより香典返しとさせて戴き度いとの連絡がありました。

山川勇一郎氏（会員番号五七〇七番 昭和三十九年入会、紹介者・深田久弥、中村清太郎）

既に新聞紙上で御承知の如く、チリ一國滞在中の山川氏は十一月十二日、ロマルゴの第一キャンプ上部の雪原でクレバスにおち遭難死された。享年五十四才。茲に謹んで哀悼の意を表します。

遺骨は十一月二十二日夜、羽田空港に無言の帰国をなし、十一月二十八日午後六時より自宅にて通夜、同二十九日午後三時より国際文化会館講堂にて追悼式が盛大に行われた。本会からは松方、日高、深田氏等多数会員が参列し、生花を捧げ、深田理事が追悼の言葉を述べた。

（留守宅）大田区南馬込町三ノ三〇ノ四、山川幸子（長女）

山内東一郎氏宅火災見舞金
カンパにつきお願い

宮城支部

ビッケル製作者として広くその名を知られている山内東一郎氏（75才）宅（仙台市追廻住宅三九八号地）が師走の十二月十五日午前十一時二十分全焼しました。御承知の如く、氏の生活は常に清貧に甘んじ粗食を省みないで、専ら全生涯を優れたビッケル製作に捧げてきましたので、今度の罹災が氏に与えた驚きは大きく、本会宮城支部では、早速、宮城岳連、東北大学、その他関係者と協力して募金活動を行うことになりました。

就きましては、本会会員中にも同氏製作のビッケルを所持されておられる方も多いと思いますので、是非とも御援助、御協力をお願い申し上げる次第であります。

尚、見舞金は左記へ御送金戴けますれば幸いと存じます。

〔送金先〕仙台市、仙台市役所民生局労働福祉課内、日本山岳会宮城支部吉野慎造宛

編集後記

★お目出たいかどうか知らないが、いよいよ昭和四十一年に入ります。これで私達は八回会報を編集して来たことになるが、二月は12頁、三月は8頁にして予算の辻褄を多少合せようと思っている。

昭和四十一年一月十日発行

東京都渋谷区神宮前
三ノ三二 外苑コーポ内
発行所 法人 日本山岳会

編集代表 吉沢一郎
電話（総機）六五〇一五
直通（機）七六五七
振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂
東京都港区赤坂溜池五番地

山岳保険に入りましょう!!

- 貯蓄にもなります。
- 万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。

御相談は **日本団体生命** へ

新宿支社（専門取扱営業所）
東京都新宿区角宮1の844 新光ビル内
電話（352）1556・1557

登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー
キスリング
株式会社 サクライ
TEL (861) 0933-5 (851) 3356-8

